彫刻刃物の技術継承を考える

車座集会 報告書

2023年 3月29日(水) 14:00～17:00

会場／日下部民藝館（岐阜県高山市）
主催／岐阜県
協力／公益財団法人 美術院

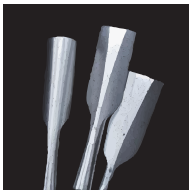
はじめに

2022年度は、大いなる危機感を抱いて走り続けた年でした。彫刻刃物を作る鍛冶職人の一人がまもなく廃業するため、国宝や重要文化財の保存修理を支える道具が今後手に入らなくなるかもしれない、というSOSが私たちの耳に届いたのが前年度の終わり頃。それまで３年間にわたり斧、鉈、鉋、鑿（ノミ）などを作る全国の鍛冶職人に聞き取り調査を続けてきた私たちは、次の１年間を彫刻刃物に関する現状調査に充てる方針を定めて動き出しました。それらは岐阜県の工芸や文化財を支えるためにもなくてはならない道具だからです。全国の11軒の彫刻刃物を作る鍛冶職人をすべて訪ねて話を聞き終えると、想像以上に深刻な状態であることが分かりました。

この危機は、私たちが動き出すずっと前から静かに進行していたものでした。私たちが動いたところで何かが急に変わるわけではありませんし、当事者の方たちにしてみれば何を今更との思いもあるかもしれません。それでも私は希望を失いたくないと思っています。長い日本の歴史の中では戦乱や飢饉などさまざまな困難があり、鍛冶職人たちが置かれた状況は決して順風満帆なものばかりではなかったはずです。それでも彼らは道具を作り続け、道具の使い手たちも彼らに道具を求め続けてきました。その積み重ねが日本のものづくり文化を築いてきました。この文化をさらに100年後、200年後へつなげるために、今の時代を生きる私たちは、できる限りのことをしたいと考えています。

この報告書は、私たちの１年間の取り組みを関係者のみなさんと共有したいと思い企画した「彫刻刃物の技術継承を考える車座集会」の記録です。まず事実を知り、共に考えることで、厳しい現状に立ち向かう原動力が得られるのではないかと考えました。この報告書を手にするみなさんにも、事実を知り、共に考え、少しでも明るい方を向いて共に歩んでいただけると嬉しいです。

岐阜県立森林文化アカデミー教授
久津輪　雅



岐阜県「匠の技を支える道具の保存伝承事業」

彫刻刃物の技術継承を考える車座集会

（目次）

03　はじめに

06　広告用チラシ

08　1. 彫刻刃物の技術継承を考える車座集会の概要

11　2. 匠の技を支える道具の保存伝承事業について

12　3. 岐阜県の文化財・伝統工芸に使われる彫刻刃物

15　4. 文化財保存修理における彫刻刃物に求められる形状や性能

19　5. 彫刻刃物鍛冶職人の現状報告

33　6. 千代鶴貞秀による小信での研修

41　7. フリーディスカッション

彫刻刃物の技術継承を考える車座集会

2023年3月29日(水)
14時～17時　／　定員50名
岐阜県高山市 日下部民藝館

岐阜県が2019年度から実施している「匠の技を支える道具の保存伝承事業」において、特に彫刻ノミ・彫刻刀を作る鍛冶職人の減少・高齢化が著しく、危機的な状況であることが明らかになりました。これらの道具は岐阜県の文化財・伝統工芸である祭屋台、一位一刀彫、日本刀の鞘などの生産や保存修理に欠かせません。

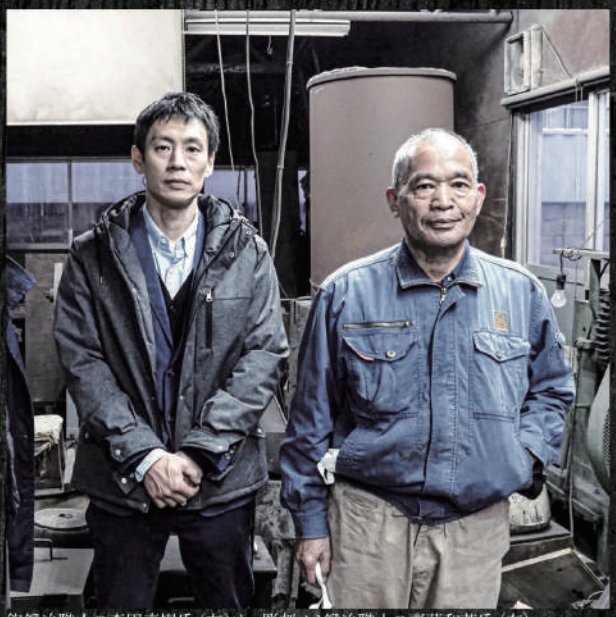
2021年に彫刻ノミの最高峰とされる「小信」の齊藤和芳氏が廃業を宣言。貴重な技術を次世代へ継承する試みとして今年2月、鉋鍛冶「千代鶴貞秀」の森田直樹氏が小信へ1週間の研修に入りました。

これらの調査・研修結果を関係者間で共有し、求められる対策を話し合います。

登壇者：
森田 直樹（鉋鍛冶職人・千代鶴貞秀工房）
門脇 豊（公益財団法人 美術院・研究部長）
西 禎恒（鉋台職人・本事業調査員）

コーディネーター：
久津輪 雅（岐阜県立森林文化アカデミー教授）

主催：岐阜県
協力：公益財団法人 美術院



鉋鍛冶職人の森田直樹氏（左）と、彫刻ノミ鍛冶職人の齊藤和芳氏（右）

テーマ　文化財・伝統工芸を支える彫刻刃物の現状と求められる対策

○今年度の「匠の技を支える道具の保存伝承事業」の調査報告（久津輪・西）
○文化財保存修理における彫刻ノミ・彫刻刀の必要性、求められる形状や性能（門脇）
○廃業する彫刻ノミ鍛冶・小信での研修結果報告（森田）
○岐阜県の文化財・伝統工芸に使われる特殊な彫刻刃物（岐阜県内の彫師ほか）
○今後求められる対策（フリーディスカッション）

登壇者

森田 直樹
鉋鍛冶職人・千代鶴貞秀工房
1978年生まれ、岐阜県出身。大学で彫刻を学んだ後、2004年に兵庫県三木市の鉋鍛冶・二代目千代鶴貞秀に弟子入り。2019年、三代目千代鶴貞秀を襲名。

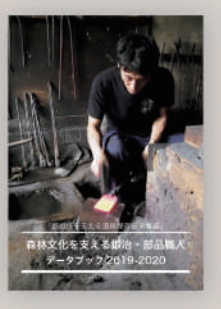
門脇 豊
公益財団法人 美術院・研究部長
1968年生まれ、山形県出身。大学で木彫・彫塑を学び、1992年財団法人（現、公益財団法人）美術院入所。以来仏像をはじめとする文化財彫刻修理および復元模造制作を通して伝統技法研究に携わる。

西 禎恒
鉋台職人・本事業調査員
1993年生まれ、神奈川県出身。京都の専門学校で京指物を専攻後、兵庫県内の木工体験施設にて道具の使用法を専門に指導。現在鉋台の製作を中心に活動。

久津輪 雅
岐阜県立森林文化アカデミー教授
1967年生まれ。NHK報道番組ディレクター、イギリスでの家具職人経験を経て、2006年より岐阜県立森林文化アカデミー木工教員。様々な伝統技術の継承活動を支援。

岐阜県・匠の技を支える道具の保存伝承事業

岐阜県では、2019年度より文化財の保存修理や伝統工芸品の生産等に用いられる道具の供給が危ぶまれる現状を受けて、道具の使い手である県内の工芸職人・技術者等と、作り手である全国各地の道具鍛冶職人に聞き取り調査を行ってきました。これまで中間報告としてパネルディスカッションの開催や、「森林文化を支える鍛冶・部品職人データブック2019-2020」の発行をしています。調査を通じて明らかになった課題の解決に向けて、2023年度も事業を継続していく予定です。パネルディスカッション記録やデータブックは、ダウンロードしてご覧いただけます。
（「鍛冶フェス パネルディスカッション」「鍛冶職人データブック」で検索してください）



会場案内

日下部民藝館 くさかべみんげいかん
506-0851 岐阜県高山市大新町1-52
☎ 0577-32-0072
JR高山駅より徒歩約15分
【P】近隣有料駐車場をご利用ください

お申し込み方法

QRコードから、入力フォームにてお申し込みください。
会場が狭いため、申込者多数の場合は選考させていただく場合があります。

*フォームに入力いただきました個人情報は、「彫刻刃物の技術継承を考える車座集会」のご案内のほか、感染症対策上の管理業務のみに使用し、承諾なく第三者に公開することはありません。
*感染症が発生した場合などに保健所等に提供させていただく場合がございます。

問い合わせ先
岐阜県立森林文化アカデミー（久津輪 雅）
☎0575-35-2525（代）
✉ mkutsuwa@forest.ac.jp

1. 彫刻刃物の技術継承を考える車座集会の概要

「彫刻刃物の技術継承を考える車座集会」

主催／岐阜県
協力／公益財団法人 美術院
日時／2023年 3月29日 14:00～17:00
会場／日下部民藝館（高山市）

《 登壇者 》
森田 直樹（ 鉋鍛冶職人・三代目 千代鶴貞秀 ）
西 禎恒　（ 鉋台職人・本事業調査員 ）
門脇 豊　（ 公益財団法人 美術院・研究部長 ）資料参加

《 コーディネーター 》
久津輪 雅（ 岐阜県立森林文化アカデミー教授 ）

来場者／54名
報道関係／3社（ 岐阜新聞、中日新聞、月刊ブレス ）

彫刻刃物の技術継承を考える車座集会 報告書

コーディネーター
久津輪　雅
（岐阜県立森林文化アカデミー教授）

小信での研修について語る
森田 直樹氏
（鉋鍛冶職人・三代目 千代鶴貞秀）

全国の彫刻刃物鍛冶職人の
調査結果を報告する
西 禎恒氏
（鉋台職人・本事業調査員）

《 開催趣旨 》

久津輪　これから彫刻刃物の技術継承を考える車座集会を始めさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

今回この集会に関しては関係者の方にチラシをお配りしたり、SNSでお伝えしてきたので、大体趣旨はご存知だと思いますが、木工に使われる道具の刃物、特に彫刻刃物を作る人たちが非常に少なくなっているという現状をまずは皆さんと共有して、今後何ができるのかということを一緒に考えていきたいと企画しました。

《 登壇者紹介 》

久津輪　司会進行させていただくのが、私、岐阜県立森林文化アカデミーの久津輪雅と申します。よろしくお願いします。普段は専門学校で木工を教えていますが、4～5年ほどこの調査をしております。

そして鉋鍛冶職人の三代目 千代鶴貞秀の森田直樹さんです。岐阜県出身ですが、現在兵庫県の三木で仕事をされています。今日は朝早くから駆けつけてくださいました。

そしてもう１人、鉋台職人の西禎恒（よしつね）さんです。西さんは兵庫県立丹波年輪の里で木工指導の傍ら、鉋台を作る仕事をされています。この調査を4年一緒にやっています。その報告を今日してもらおうと思っています。

《 会場紹介 》

久津輪　今日この集会をなぜここでやろうと思ったのかご紹介したいのですけれども、岐阜県のイベントなので岐阜県庁や公共施設でやるというのも良かったのですが、やはりこの彫刻刃物を使う人がたくさんいる町、飛騨の匠の歴史があって、祭屋台とか一刀彫とか、そういう歴史があるこの町でやりたかったということと、その飛騨の匠の象徴である建物がこの日下部民藝館だと思うので、こういう建物の文化を今後も残していくために道具が必要ですから、この場所でやらせていただきたかったのです。そこで日下部ご夫妻にお願いして、こちらの館を貸していただくことになりました。日下部民藝館が初めての方もいらっしゃると思いますので、日下部さんの方からご説明を簡単にお願いできますでしょうか。

日下部　皆さんこんにちは。今日は平日のお忙しい中、大勢足をお運びいただきましてありがとうございます。今紹介を受けました私でこの日下部家の十三代目です。この日下部民藝館ですが、明治8年の高山で1,000軒以上焼ける大火の時にこの家も全焼しております。その4年後の明治12年に建てられたのがこの建物でございます。当時飛騨で1、2を争う名工と言われた川尻治助という棟梁にこの建物を建てていただきました。ちなみに隣の吉島家さんは、西田伊三郎という棟梁が建てられた建物でございます。日下部家・吉島家ともに国の重要文化財に指定されております。川尻治助さんは一刀彫の彫師の系譜であり、お隣の吉島家さんは宮大工の系譜の大工さんで、それぞれやはり個性があり、日下部家と吉島家は似ていると言われますが、よくご覧いただきますと似て非なる建物でございます。観光施設ですので本日も午前中は溢れかえるほど外国の観光客がいらしていました。観光の目的や理由は食文化や自然など様々ですが、やはり日本の伝統工芸や寺社仏閣を観に来られる方が大勢いらっしゃる。その中で、こういう建物を建てる道具を作る方々がこの日本から少なくなっているということは、これだけ政府がインバウンドと言っておきながら、ある意味では本当に本末転倒だと私個人的に思います。ぜひ皆様が色々とお知恵を出されて素晴らしい会となることを祈念申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

《 スタッフ紹介 》

久津輪　こちらからスタッフを簡単に。受付等をやってもらっている蓑谷百合子さん。高山で工芸コーディネートをしていて、この１年調査に関わってもらっています。そしてこの事業を主管している岐阜県庁文化伝承課の河田哲也課長、末松光孝係長です。

《 来場者紹介 》

久津輪　本日は色々な分野の方にたくさんご参加いただいていますが、お一人ずつ自己紹介していただくとそれだけで１時間かかってしまうので、簡単にこちらから分かる範囲で紹介させていただきます。

一刀彫より鷲塚浩さん、鈴木彫刻さん、仏師の高田慈眼さん。高山の家具業界より、飛騨産業株式会社の岡田明子社長、日進木工株式会社さん、ARTS CRAFT JAPAN（アーツクラフトジャパン）さん。松本から木工の三谷龍二さん、匙を彫っている大久保公太郎さん、我谷盆を作る京都の森口信一さん、中津川でスプーンを作っている金城貴史さん、岡山からさかいあつしさんも小信の刃物を使っているということでいらっしゃいます。南京鉋を作っている杉田悠羽さん、杉田さんは調査メンバーでもありました。鍛冶屋さんでは、はるばる新潟県からお越しの鉋

鍛冶 水野清介さん、弟子の似鳥透さん、岐阜県の野鍛冶の佐野元治さん、関市の刃物メーカー・貝印株式会社から技術者の方々。文化財関係の仕事に携わっている方では、高山陣屋の樽へぎの営繕手の松山義治さん、樽へぎ研究会の会長で大工の川上舟晴さん。教育関係で森林たくみ塾の平野良尚さん、森林文化アカデミーから私と渡辺圭、長野県上松技術専門校の内田実先生、ものつくり大学の土居浩先生、軽井沢の風越学園さん。流通関係では丸進工機の寺地真太郎さん、富山の井波彫刻の町からは彫刻刀専門店・匠雲堂の岡田榮吉さん、長野県のはじめ手道具店の高橋一真さん。行政関係では、岐阜県の地域産業課岩崎侑里子さん、岐阜県生活技術研究所研究員で飛騨漆の森プロジェクトの村田明宏さん。・・・ご紹介できなかった方、ごめんなさい。これだけ広い分野の方に今日ご参加いただいて、一緒に考えていきたいと思っております。会場の方にも意見いろいろお聞きしますので、よろしくお願いします。

2. 匠の技を支える道具の保存伝承事業について

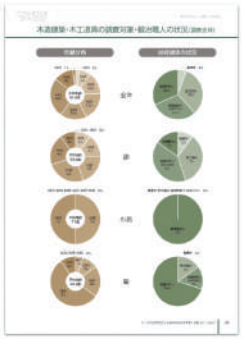
久津輪　この事業のきっかけですが、もともと高山市の左官職人の挾土秀平さんからの言葉で、「職人は後継者は育成するけれども、職人が使う道具を作る人が少なくなっている。その道具を作る人たちがいなくなってしまうと、いくら技術を継承しようとしてもできなくなる。岐阜県として一度そういうことを調査した方がいいのでは」と提言があり、それを受けて、県で調査することになりました。それが2019年、今から4年前です。

全国の鍛冶職人から聞き取り調査

岐阜県では関が刃物で有名ですが、実際に日本刀の鍛冶屋さんはいるけれど、こういう道具を作る鍛冶屋さんはほぼいないのです。県外の鍛冶屋さんに頼っているという状況で、まず、どこで誰が何を作っているのかを知るために、一軒一軒聞き取り調査をすることにしました。当初は私と壇上の西さん、後ろに座っている杉田さんの3人で調査を行いました。

パネルディスカッション（2020年1月）

調査して1年経ったところでパネルディスカッションを森林文化アカデミーでさせていただき、今日お越しいただいている新潟の水野さんや樽へぎ研究会の川上さんにも登壇してもらいました。



中間報告書

パネル
ディスカッション
記録

中間報告書（2021年3月発行）

そして次の年には中間報告書ということで、「森林文化を支える鍛冶職人・部品職人データブック」を発行しました。会場にも置いてあります。ダウンロードもできますので、全頁読むことができます。

調査カード（非公開）
道具の生産者 133件　使用者 57件　仲介者 34件

その他に調査カードを作りまして、一軒あたりA4で5枚から6枚、「後継者がいるのか」「何を作っているのか」「原材料や道具で困っていることはないか」などかなり細かく聞き取りをして、ファイリングしてあります。道具を作る人133件、使う人57件、お店や組合など34件。現在はもう少し増えていると思いますが、それだけの蓄積をしてきました。

そして3年経った去年の今頃、本日の本題でもあります東京の彫刻刃物「小信」が廃業することと、その小信の道具に焦点を当てた講座が開催されるという情報を西さんがインターネットで見つけてきました。長年小信の刃物を使って国宝を修理されている美術院の佐藤元彦さんという方が緊急報告会を奈良県でされるというので、西さんと一緒に聞きに行きました。その時に、文化財の修理においてこうした道具がいかに重要なのかということ、特にその小信さんがどれだけ高い信頼を得ているのかというのを聞きました。私達の調査は鉋、ノミ、鉈、斧など色々なものをやっていたのですが、これからの1年は彫刻刃物に集中しようということで、去年の今頃（2022年春）から始めました。

彫刻刃物に焦点　美術院、文化庁と連絡

美術院の佐藤元彦さんと知り合えたことをきっかけに、美術院や文化庁と連絡を取り合うことができるようになりました。美術院の国宝修理所は普通の人は入れないそうなので、初めてお会いするにあたって外で会食の場をセットして、お話しさせてもらいました。写真中央に写っているのが、美術院国宝修理所の所長の岩下淳さん、左側の方が本来であれば本日登壇される予定だった門脇豊さんです。右側に千代鶴の森田さんと西さんが写っています。飲食店で刃物をたくさん出して大丈夫かなと思いつつも、熱い刃物談義を繰り広げました。これが2022年9月のことです。

3. 岐阜県の文化財・伝統工芸に使われる彫刻刃物

《 関の鞘師 》

久津輪　彫刻刃物に集中するようになり、日本全体に関係するようになってきましたが、この事業は岐阜県の予算ですし、自分も県の職員であるので、この調査が岐阜県とどのように関わるのかということを明らかにしようと、岐阜県の文化財や伝統工芸で誰がどのような刃物を使っているのかを合わせて調査することになりました。

森 雅晴さん

森 隆浩さん

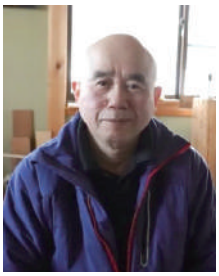
親子で100本ずつほど鞘を製作　関市に鞘師は7～8人

岐阜県といえば日本刀が有名で、鞘を作る鞘師さんがいらっしゃいます。関市には鞘師の方が7、8人いらっしゃいます。その中で代表格の方が、この森雅晴さん、森隆浩さん親子です。それぞれ年間100本ぐらいずつ鞘をお作りになっているという、非常に忙しいお仕事をされている方々です。実は隆浩さんをここにお誘いしたのですけれども、今日はお仕事の関係でご欠席です。その森さんにお話を伺ってきました。

鞘師ノミ
（すきノミとも）

鞘師が使うノミというのはとても特徴があり、鞘師ノミと言ったり、すきノミと言ったりします。このように横から見ると反っていますね。手前が平ノミ。奥が丸。基本は4種類の鞘師ノミを揃えるのだそうです。1本が角で3本が丸。丸は幅と曲り具合が違うものを揃えるそうです。お父様の雅晴さんで10本ぐらい、息子さんはもう少し少ないそうです。隆浩さんの友達の鞘師さんには、4～5本の鞘師ノミを3セットまとめて研いでおいて、切れなくなったら廻して使い、研ぐ時間を節約している方もいらっしゃるそうです。だから、こういうノミを十数本使っているということですね。こういうノミは普通の大工ノミと異なり、いわゆる「特殊ノミ」を作る鍛冶屋さんに頼みます。それが彫刻刃物を作る鍛冶屋さんと同じなのです。森さん達は、関市の刃物商（刃物屋さん）に依頼して、その人の伝手で兵庫県三木や東京の鍛冶屋さんに作ってもらっていたとのこと。その関の刃物屋さんも一軒は去年亡くなり、もう一軒も一昨年お父様が亡くなられて代替わりされて、鍛冶屋さんとのルートがだんだん細くなってきているので、これから先ちゃんと調達できるかどうか不安もあるという話でした。

《 高山の仏師 》

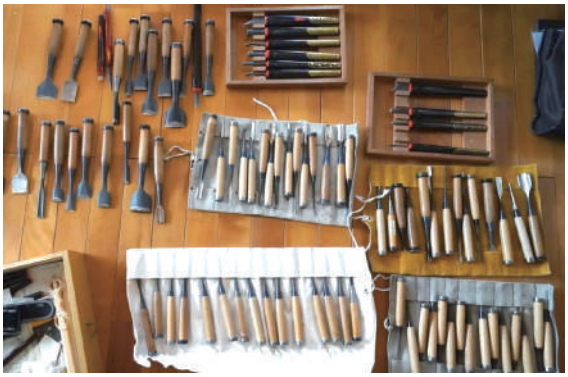


仏師　高田 慈眼さん

高田 和司さん

久津輪　今日お越しいただいていますけれども、高山の仏師、高田慈眼さんと和司さん親子。慈眼さんも最初は一刀彫りの仕事をされていたのですよね。一刀彫や仏師のお仕事だと、大まかに3種類の刃物を使うということで、見せていただいたのが彫刻刀と、小道具と呼ばれる刃物と、叩きノミの3種類です。

客席より 高田 慈眼さん　細かく言えばこれだけではないのですが、平たい刃物は今日いらしている匠雲堂の岡田さんから購入したものです。丸ノミはたくさん種類があって、平ノミ、丸ノミ、三角ノミと、400本ぐらい使っています。ただ、彫刻刀を作る鍛冶屋さんがいなくなってきている。これは非常に心配です。私の代は大丈夫ですが、これからノミがなかったら仕事ができませんので、ぜひともなんとか考えていただきたいと思っています。



久津輪　ありがとうございます。こちらも慈眼さんの叩きノミでしょうか。これだけの種類と本数をお使いになっているということです。

《 高山の彫師 》

久津輪　次に彫師さんです。全員に面会できたわけではないのですが、私たち調査員で手分けして、これまで12軒の一刀彫の彫師さんの話を伺ってきました。鷲塚さん、和仁さん、鈴木さん、東さん、津田さん、谷口さん、村上さん、清水さん、小坂さん、若林さん、源田さん、吉野さん。

森林文化アカデミーの非常勤講師に来ていただいて、以前お会いしたこともある小坂礼之さん（今日は所用でお越しいただけないとのこと）。小坂さんに「全部で何本持っていますか？」と聞いたところ、「数えていないから分からない」と仰っていました。ただ、いろいろな特注の仕事があって、特定の形でないと彫れないということもあり、年間に大体20本、多い時は40本新しいものをおろすそうで、それだけの本数の新しい刃物を必要とするというお話もありました。

小坂 礼之さん

年20～40本を新たにおろす

作るものによって必要とする本数や種類も違うのでしょうけど、これだけの道具、刃物を必要とする職人さんが高山にはたくさんいるということです。

全体として日本刀の鞘師さん、仏師さん、彫師さんから話をお聞きすると、刃物の入手先としては、若い頃に東京の彫刻刀の専門店で買いましたと仰います。有名なところで光雲とか宗意とか、そういったお店で買ったという話を聞きます。あるいは井波の彫刻刀専門店、今日いらしてる匠雲堂さんとか、東京や三木からの行商の鍛冶職人から買うという人たちもいらっしゃいました。ですが、彫刻刀の専門店が減っていて、入手が今後できるか不安を感じるという話も聞きました。実際にさっき申し上げた東京の光雲は、もう閉店していてありません。宗意も今回この3人のメンバーで東京に調査に行った時に立ち寄ったのですが、ご主人が亡くなってしばらく経ち、年配のお母さんと娘さんでやっていらっしゃるのですけれども、お母さんしか詳しいことがわからないので、お母さんがお店をできる間まで続けると仰っていました。東京を代表する彫刻刀の店が本当になくなろうとしている、そういう状況です。

また、ここがポイントなのですが、さっき高田さんも仰っていたように、「自分の代は今持っている道具で仕事ができる」ということです。こういう調査をすると、大体組合の理事長さんなどから話を聞き始めるのですが、そうすると「私の代はまぁ大丈夫ですから」と仰るのです。ここが原材料と違うところかなと思いました。私は伝統工芸の材料確保のお手伝いもしているのですが、材料は年配の方でも毎年使うものだから、だんだん少なくなってくると声がすぐに上がるのですが、道具に関してはベテランの方からSOSの声がなかなか上がらない。しかし一方では、これからこの世界に入ろうとする人たちが、道具を手に入れることが難しくなってきている現状があります。そこで、彫刻刀とは分野が違うのですけれども、森林たくみ塾の平野さんにお話を聞いてみたいと思います。平野さんから聞いたお話で印象に残ったことがあるので、去年の道具の調達の話をしていただきましょう。

客席より 森林たくみ塾 平野 良尚さん　森林たくみ塾の平野です。木工の教育機関、木工塾なのですが、毎年10人前後の若者を受け入れて職人の養成をしています。毎年新入生が入ってくると、主に新潟の平出商店さんで道具を人数分揃えてもらうのですが、2～3年前から道具の集まりが悪くなってきて、去年は年明けには頼んでいたものが4月に揃わなかったのです。道具が揃わないとカリキュラムにも狂いが生じます。彫刻刃物ではないですが、基本的な追入ノミとか平鉋とか、その辺の道具がなかなか揃えにくい状況です。毎年10人ぐらい木工を志して入ってくる人たちはいるけれども、その人たちが使う道具というのが揃い難いという状況で、今後どうなるかなと思っています。

久津輪　ありがとうございます。他にも教育に携わっている方で同じような経験をされている方もいらっしゃるかもしれません。この高山でも、ベテランの方たちは今ある道具で仕事ができるからそれほど危機感がないかもしれないけれど、同じ高山でも今から木工の道に入ろうとしている人たちは、既に道具が入手し難くなってきているという、そういう状況に入っているということを改めて共有しておいた方が良いかと思います。

4. 文化財保存修理における彫刻刃物に求められる形状や性能

次に今回の彫刻刃物の調査を始めるきっかけとなったところでもある、公益財団法人美術院の門脇さんの発表です。私が原稿とスライドを代読させていただきます。

門脇：久津輪代読　公益財団法人美術院 門脇 豊と申します。本日は皆様お集まりの車座集会において登壇発表者として名を連ねておりましたが、事情により欠席となり、久津輪先生に代理での発表をお願いする形となりました。皆様どうかご了承ください。

写真は自分で普段からこれだけは必要と思って工房に置いている彫刻刃物です。ノミは小信・信吉・中山商店（仙台）など。彫刻刀・小道具はもっと多くの鍛冶職のものを試して使っています。小信・信吉・研綱・光雲・清忠・石堂・左久作・義近・竜作・高田・高昇など。

《 自己紹介 》

わたくし門脇は、昭和43年（1968）山形県山形市出身です。東京学芸大学にて橋本堅太郎氏に師事し、木彫と彫塑を学びました。平成4年（1992）財団法人（現、公益財団法人）美術院に入所しまして、

・文化財保存修理技術者として仏像、神像など伝統的彫刻の保存修理
・文化財の復元模造、伝統技法の再現研究
・美術工芸品制作・修理に用いられる用具・原材料の現状調査

現在はこれらの仕事に携わっています。

※以下 ○＝久津輪から質問　→ 門脇氏の回答

○美術院に入所するときに、どこでどのような刃物を揃えるのか。

→ 美術院に入る前から道具を揃えている人は少ないので、新人職員には基本的な木工道具、木彫道具、漆工道具を貸与して、まずは1年間、初歩の養成期間に使ってもらいます。

・木工道具
　京都市内の道具店を通じて、三木（兵庫）・三条（新潟）・与板（新潟）の道具を入手することが多い。
・彫刻道具
　東京・三木の刃物鍛冶に直接注文して入手。
・漆工道具
　京都市内の漆工用品店を通じて入手。

○道具は自費で購入するのか。

→初歩の養成期間は貸与される道具だけでも済みますが、徐々に自費で同様の道具を購入して、その分貸与の道具は美術院に返却していきます。また、実際に修理の仕事を始める頃は、足りない道具を先輩技師に借りて使うこともあります。そうしたら、「人に借りた道具をすぐ自分で手に入れなさい」と若手には指導しています。

やみくもに一分（3mm）刻みの寸法で道具を揃えるよりも、実用的な道具を揃えられるコツだと考えています。一通りの道具が揃うには、やはり仕事が身につく期間と同じく5年から10年ほどを要します。

《 仕事の一例　文化財保存修理 》

まず私の仕事の一例を紹介いたします。木彫で作られるわが国の仏像や神像は、長い年月のうちに木材が劣化したり、木材どうしの接合にゆるみが出て、やがては自立も難しい状態になります。そこで、仏像などが今後も安置を続けられるように、構造補強を施します。

他にも虫食いや転倒などで彫刻が傷み、部分的に造形が失われることも多いです。この場合は、当初からの形にならって彫刻を補作して、お姿を整えます。補作には失われた部分から損傷が広がるおそれをなくす役割もあります。ただし、失われた部分について形の根拠が得られないときは、あえて補作をしないという選択もあります。

木造仏像の構造補強、彫刻の補作

いま紹介しました仏像や神像の構造と形に関わる修理に加えて、像の表面に残る彩色や漆塗りの保存も大きな仕事です。これを私たちは剥落止めと呼んでいます。彩色や漆塗りが痛々しくはがれていても、わずかしか残っていなくとも、これらは仏像や神像が作られた当時の姿を残す証拠だからです。

表面彩色の剥落止め

《 木彫・木工技法の保存継承 》

一方、木彫・木工・漆工・彩色という伝統技法は私たちの修理技術の基礎であり、私たち修理技術者はその保存継承を担う立場でもあります。仏像や神像がどのように作られているかを理解するには、私たちも同様の技法で像を作ってみることが必要だと考えるからです。

そのため、現代ではほとんど行われないヒノキ大径木の横挽き製材を自ら手掛けて、製作を始めることもあります。

ヒノキ大径木の横挽き

このヒノキ材は、一木造仏像の再現研究で等身大坐像をほぼ一材で丸彫りするために使いました。当然ながら彫刻は木彫ノミ、彫刻刀といった手工具だけを使って彫り進め、木彫のあとの漆塗り工程、彩色工程もそれぞれ専門の技術者が本来の技法を探りながら進めていきました。

一木造仏像の再現研究

《 文化財保存修理において刃物・道具に求めるもの 》

ここまで文化財修理技術者としての私の仕事を紹介いたしましたが、本日の集会の表題「彫刻刃物の技術伝承」という問題は、私たちも木彫の技能を学んで修理にあたる以上、決して避けては通れないことです。それでは、文化財保存修理において刃物・道具に求めるものは何か、私も考えてみました。広い目でみれば仏像修理も木彫・木工職の一分野であり、刃物と道具に対する要望は本日お集まりの皆様と基本的に変わることはなく、「これは道具としてあたりまえのことでしょうが」と思われるかもしれません。

◎「切れる」こと、「研ぎやすい」こと
硬すぎて刃先が欠けるもの、軟らかすぎて刃先が尖らないものは使いにくいです。

◎ 基本的な作りがしっかりしていること
例えば、平刃なら刃裏にねじれや反り・屈み（こごみ）がないこと、丸刃なら曲面に歪みがないこと、ノミは刃先から柄まで軸線が通っていることが基本です。
「ただひとつしかない」文化財の修理に集中するために、刃物・道具は品質と調整の心配が少ないものを求めたいのです。

続いて文化財保存修理という仕事の特性上、大事にしたい事柄を挙げます。

◎ 品質が安定して、製造むらが少ないこと
熟練者から若手まで同等の道具を使ってこそ、文化財修理の品質・水準が保たれます。

◎ 長期にわたり製造が続くこと
現役の世代だけが良い道具の恩恵を受けるのではなく、これから修理技術者になる人たちにも刃物・道具を入手できる環境が必要です。「ただひとつしかない」文化財の修理は、世代を越えて続く活動だからです。

《 彫刻刃物存続に対する危機感 》

しかし、久津輪先生はじめ調査チームの皆様が実施された鍛冶・道具職人の現状調査のご報告を伺うに、私がこれまで個人的に抱いていた危機感が現実となっていること、そして想像以上に事態は深刻であることを痛感しています。

◎ 現在の鍛冶職の年齢構成を考えると、あと5～10年でほとんどの方が引退すると予想されます。通常の商号・事業継承とは違う形で、製造継続の方策を考える必要があります。

◎ これまでと同様の道具が手に入らないということは、先人が作れたものを現代ではできないという事態になりかねません。

そして、私たち刃物・道具の使用者がほとんど関与できない産業と流通の問題も明らかになってきました。

◎ 鍛冶職が使える材料の入手が困難になっています。刃物用鋼材・鉄材（地金）の生産縮小、中間流通業（問屋・代理店）の材料取り扱い減少が進んでいます。

◎ 彫刻刃物をはじめ、いわゆる手仕事に使われる刃物・道具は「産業の道具」と見なされていません。産業振興を目的とした支援が届かないのです。

《 彫刻刃物の技術継承に期待すること 》

これらの問題を前にして、自分たちのあまりの微力、あるいは無力感に襲われる方も多いかとお察しします。伝統工芸・現代美術・新作創作・文化財修理、それぞれの立場を問わず、彫刻刃物存続の危機はすなわち「木彫」文化存続の危機なのです。

一方で、近年木彫で新たな表現を展開する中堅・若手の作り手が現れていることも事実です。また、文化財修理を志望する方々も多く、新たな世代が木彫の道に踏み込もうとしています。

これから木彫に携わる人達にも、先人が繋いできた刃物・道具と手仕事の知恵を届けたい。このように皆様もお考えいただければありがたく存じます。
本日の「車座集会」盛況を願っております。

門脇さんが使用している 小信の二寸三分幅丸ノミ

○小信さんとの出会いやお付き合いなどのご紹介を。
→大学に入り木彫・木工の初歩を学ぶことになりましたが、木彫の先生・木工の先生双方から「本気でやるなら小信の刃物を手に入れなさい」と勧められたのが始まりです。特に木彫の先生（故・橋本堅太郎氏）は親子二代の木彫家で、お宅に小信初代ほか刃物鍛冶の方々がよく出入りされていたとのお話を聞きました。

最初は大学の木彫室にある備品の刃物を使っていましたが、学年が進むと自分の刃物を手に入れなければと思い、田無の小信さんの工場まで自転車で行き、一寸幅と五分幅の平・浅丸・深丸の計6丁という、ごく基本的なノミ一揃いを注文したのが最初です。

その後美術院に入所してからも、引き続き彫刻ノミはほとんど小信さんに注文していました。将来家庭を持つとあまり道具にお金は使えなくなると思い、入所から7〜8年目ころに集中して、木彫職の看板道具とも言える二寸幅、一寸八分幅など大きい道具を作っていただきました。

○最近は新しく入所する技術者に購入を勧められる店が減っていると聞くが。
→京都市内の道具店もこの20年ほどでずいぶん廃業したため、自分の足でお店に行って実際に道具に触れてみるという体験ができないというのは、大変な損失に感じます。

もうひとつ、あまり言いたくはありませんが、刃物の形はしているけれど、基本的な作りがなっていない品物が多すぎるように思います。そのような刃物を初心者に持たせてもとても調整しきれず、使うのがいやになっていくばかりです。初心者にこそ、正確に作られて調整しやすい刃物を提供すべきと私は考えていますが、その意味で品質の良い刃物とそれを手掛ける鍛冶職が本当に少なくなっていると感じます。

久津輪　実は私はまだ一回しかお会いしていないのですけど、この文章からも分かる通り、門脇さんは非常に熱い思いを持った方です。私は岐阜県からの仕事で、2019年から全国の鍛冶屋さんを回って聞き取り調査をしてきたのですが、この門脇さんも普段は国宝を修理する立場でありながら、道具の供給に非常に危機感を覚えて、自費で全国各地の鍛冶屋さんに聞き取り調査をされていたのです。それで、お互い知り合ったときに同じことをしているというのが分かって、最初の段階からすごく意気投合して、同じ熱量の人に出会ったという感じです。それがきっかけとなって、門脇さんから文化庁の方に繋いでいただいて、文化庁のサポートも受けながら調査ができるようになってきました。今日お越しいただけないのは大変残念ですけれども、門脇さんの話をご紹介しました。

5. 彫刻刃物鍛冶職人の現状報告

次にもう一つ説明をしてから休憩に入りたいと思います。ここからいよいよ、12月から1月にかけてこの壇上の3人で調査した内容をお伝えしようと思います。

その前に西さんの紹介です。

久津輪　この写真ではずいぶん大きい鉋台を作っていますけど、これは幅いくつですか。

西　これは五寸幅、師匠の鉋の台を掘らせてもらったときのものです。

久津輪　西さんに簡単な経歴を自己紹介してもらいます。

西　京都の伝統工芸大学校に18歳から20歳まで通い、その後、兵庫県丹波市にある木工施設の指導員として今年3月まで勤めておりました。その傍ら4年ほどこの調査の調査員を務め、5年ほど鉋台を作る仕事にも取り組んでいました。今年から本格的に鉋台の製作を中心に活動を始めていくというところです。

久津輪　そもそも何で鉋台職人になろうと思ったのですか？

西　木工自体でこういうものを作りたいという思いが芽生えず、ずっと道具ばかり触って遊んでいました。最初に買った鉋は学校で支給されたものでしたが、その次に道具を探そうと思って、直接水野さん（来場している新潟県の鉋鍛冶職人）に連絡を差し上げたことがあったのです。水野さんの鉋を学生の頃に買わせていただき、そこから道具に触れる機会が増えていきました。その中で「道具を作っている人が少ない」「部品を作っている人がいないんだよ」とか、職人さんに触れる場面が増えていき、自分は木工よりもこちらの方が向いていると思うようになったのが、鉋台を作るようになった大きい理由になっています。

久津輪　でも、教えてくれたお師匠さんに「そんな独立するなんてやめなさい」って言われたんですね？

西　そうです。鉋台の師匠もそうですし、鉋刃物について教わった鍛冶屋さんも、皆さんいろいろ面白い世界を見せてくれたのに、「いざやってみます」と言うと、「やめなさい」とか「今の勤めを続けながら、趣味でやっていなさい」とアドバイスをいただいたのですけれども、いよいよ勤めを辞めて、鉋台をやることに、今なっております。

久津輪　私が西さんと最初に知り合ったのは、西さんがまだ26歳の時です。若いのにものすごくしっかりしていて、ちょうど三木の辺りで鉋台を習いながら仕事をしていたから、兵庫県三木市の鍛冶屋さんの情報にとても詳しかったので、兵庫県の人ながらお願いして岐阜県の調査メンバーに入っていただきました。それからずっと一緒に調査しています。

ではここからは西さんに報告してもらいながら、私と森田さんの方から補足で説明をしたいと思います。

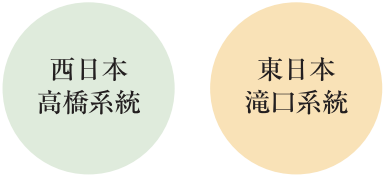
西　今回の調査内容としては、鍛造と呼ばれる手仕事で彫刻刃物を作られている方を対象に、全国の調査を行って参りました。量産メーカーなど、たくさん機械で作るようなところは含みません。その条件に合った鍛冶屋さんが全国で11軒ほど、東日本５軒（東京２、埼玉２、福島１）、西日本に６軒（京都１、兵庫５）ありました。

久津輪　まだ私たちが掴みきれていない、今回伺えてないところもあるかもしれないですが、私たちが行けたところで、この11軒ということです。

西　この中に先ほど出ていた小信さんも含まれております。

久津輪　地域で言うとこんな風になるということですね。

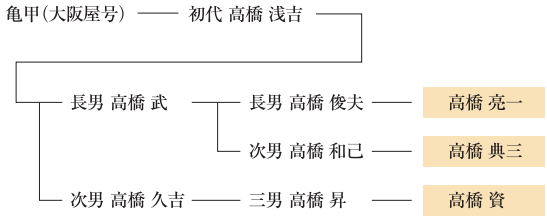
全国の彫刻刃物鍛冶の系譜



西　調べていくうちに、全国の彫刻刃物を作っている鍛冶屋さんの系統というのがあって、東日本では滝口系統、西日本では高橋系統という系統があるというのが見えてきました。

小信がそうですが、関東では刃物鍛冶の名門である滝口家の流れを汲む鍛冶屋の系統があり、そこから他の地域の鍛冶屋さんも生まれていったこと、仕事を習った方が何人かいるという流れもわかりました。

高橋系統



一方関西では、大阪の鍛冶屋さんから始まり、その後、高橋浅吉さん、長男次男と続いていった家系の末裔にあたる方、スライドの黄色で囲んでいる所、高橋亮一さん、高橋典三さん、高橋資さんという３軒が、現在兵庫県三木市で活動されている高橋系の鍛冶屋さんです。

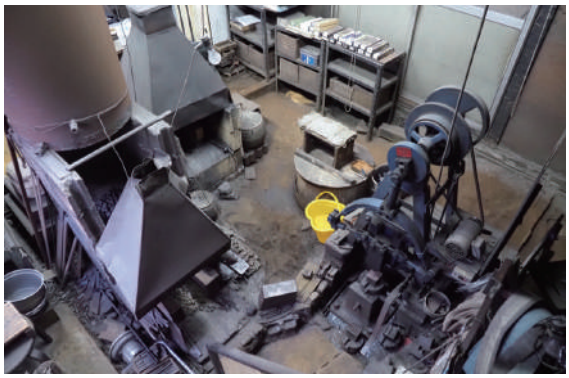
久津輪　黄色い部分上から、高橋特殊鑿製作所、高橋和己特殊鑿製作所（通称カネタケ）、三人目は高昇鑿製作所、聞いたことがある方もいらっしゃるかもしれませんが、この高橋家が特殊ノミを中心的に作っていらっしゃる方達ということですよね。

西　はい、そうですね。

久津輪　これを見て私が少し思ったのは、関東では滝口系統の方々から伝わっていって、従業員の人たちに暖簾分けをしていたというのですけれども、関西の方では高橋家、やはり親族中心に技術が継承されていて、いずれもあまり広く技術が伝わっていないというか。そういうことが調査から少し見えてきたかなという感じです。

では、ここから一軒一軒、全部で11軒あるのでざっとおさらいするというような形ですが、西さんから報告してもらいます。

西　最初に株式会社小信（東京都西東京市）の齊藤和芳さん、75歳。廃業宣言をされています。お父様は大工ノミの鍛冶職人さんで、ご自身は彫刻刃物の名門「小信」の二代目に弟子入りされています。別の家系から弟子入りされたという形です。廃業の決断につながる理由として、二寸の大きなノミが叩き切れないほど腕力の衰えを感じ、自身の体力があるうちに受注分を納めたいと、2021年に廃業を決意されております。現在は残りの受注分をこなすのみです。これまで小信さんの下では2名の若い方が技術を学んだと聞いていますが、事業継承には至っておらず、現在別の仕事に就いているということです。



小信さんは創業時より小売り専門です。問屋さんへ卸すのではなく、ユーザーと直接取引がほとんどでした。取引自体は4カ所ほど、彫刻系の学科がある学校と取引があったそうです。ただ、小信さんの廃業によって、その学生さん向けノミが今後どうなるのか、そして他の鍛冶屋さんへの集中が懸念されます。また、門脇さんの報告にもあったように、文化財関係者からの信頼が非常に厚く、造形すべての刃物にヤスリをかけ、手間をかけて成形していくので、非常に作りや切れ味が良く、品質に定評があると。こちらに関しては、また森田さんから報告があると思います。

久津輪　写真に写っているのは丸ノミと塗師屋包丁ですね？

西　そうですね、塗師屋包丁と丸ノミですけれども、正確には「へり上がり」というものです。

西　次に八重樫打刃物製作所（東京都葛飾区）の八重樫潤一さん、70歳。工房自体は下町のマンションの前に看板があるような、町中にある鍛冶屋さんです。初代は岩手県の刀鍛冶から技術を学んだそうです。二代目が東京で創業して、現在で四代目となるそうです。

大月 正高さん(39)

小沼 亮介さん(31)

7年前から、技術継承のために弟子を受け入れています。区の育成制度も活用されるなど上手な弟子の育成で、今回非常に気になる存在でした。お弟子さんが、大月正高さん39歳と小沼亮介さん31歳。小沼さんが7年目、大月さんが5年目。小沼さんご自身は、こちらの継承に意欲があると、調査でお聞きすることができました。こちらの大きな特徴が、鉄を叩く工程。本来鍛冶屋さんは大きい機械のハンマーを使うのですが、こちらでは機械がなく、お弟子さんと一緒に昔ながらの向槌(むこうづち)というものを使って、お互いに手作業で鉄を伸ばす作業をされています。この向槌先手(さきて)という工程について、森田さんからお願いします。

森田　向槌というのは一人が主に製作をする側で、大きい槌を持っている人が先手、座っている人が横座(よこざ)。大きい槌を持っている人は機械のハンマー役で、ひたすら叩く役目。横座が成形のために手順を踏んでいく人です。

久津輪　現在だと、機械のハンマーでガンガン叩くのが当たり前だと思いますが、人が叩く所はかなり少ないですよね。

森田　そうですね。大抵はハンマーを導入されているところが多いです。

久津輪　ハンマーがないと数はそれほど作れないということになりますかね。

森田　そうなってくると思います。

久津輪　多分住宅密集地なので、騒音の関係もあってハンマーが入れられないのかもしれないけれども、珍しい所でした。

西　製作内容自体は包丁、彫刻刀物、機械刃物それぞれを3分の1ずつ作っているということでした。大工道具店への卸注文が減ってきたことから、ウェブサイトを作って直販も始めたということです。刃物以外にも、ナイフや包丁の柄など木部加工も内製化して、お弟子さんやご本人が作っているということです。

以前、文化財関係の仕事で和釘数万本の仕事依頼があったが、大量に作れるかどうか検討して、数年かかってしまうのでお断りしたそうです。

久津輪　これはちなみに、下駄屋さんの特殊ノミですね。

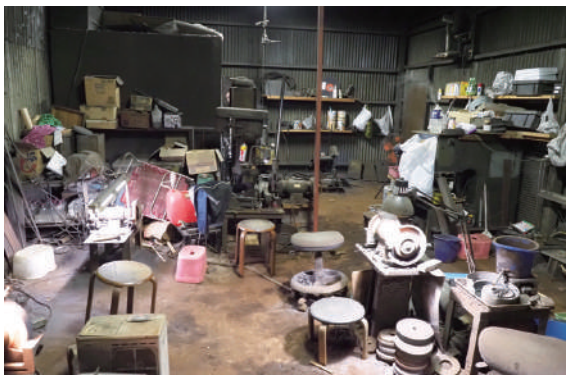
西　そうですね。これが十能ノミですね。

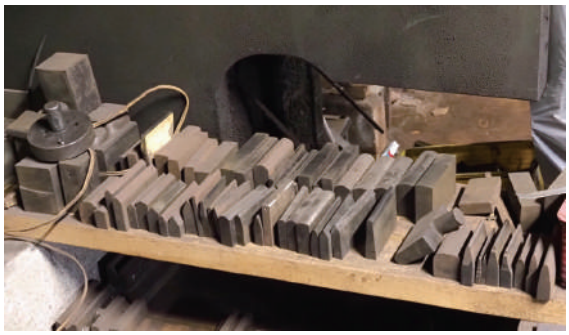
久津輪　最近では下駄屋さんでもこういうノミを使うことは少なくなってきましたが、注文があれば作るよということでした。あとちょっと変わったところで、これを見せてくれたのですよね。

西　そうですね。こちらは豆腐屋さんのパッケージがありますが、ドレッシングやソース等のパッケージを切り抜く機械用の刃物を作ったりしていると仰っていました。

久津輪　機械用の替刃がないからこういうものを作れませんかと、ウェブサイトを見て尋ねてこられる。現物があれば作れるよと、何でも対応しますということでした。11軒回った中で、若いお弟子さんがいるのはここ1軒だけでした。

西　続いて、高橋製作所（埼玉県さいたま市）の高橋和彦さん、70歳。こちらは義理のお兄さんが、東京の滝口系統の鍛冶屋さんに勤めていた鍛冶職人だったそうです。その義理のお兄さんから仕事を教わって、34年前に独立されているので、高橋製作所としては初代ということでした。





久津輪　ここも住宅外のちょっとはずれのようなところでしたね。

西　そうですね。ちょっと歩けば小学校があるような場所でした。ほとんど卸売のみで表に出ることはないので、ご存知の方は少ないとご自身が仰っていました。彫刻刀の原材料になる鋼と地金を鍛接した幅広い大きな２層材を自作されて、ノミの柄を挿す部分の中子（なかご）をプレスで作って研磨したりと、なかなか他では見ることができない独自の作り方を工夫されて、彫刻刃物を作られている職人さんでした。

久津輪　これをプレスでというのが、技術が分からないと分かりにくいかもしれないけれど、普通は叩いて成形していく所ですかね。それをプレス機械でガチャンとやって、後は研磨して形を整える効率の良い作り方を独自に開発されている。

森田　そうですね。つぶした後、切断機で切っていると思います。

西　それ以外にも、彫刻刃物は全て手がけるという職人さんでした。

久津輪　こういう細かい彫刻刀の刃も全部作れますということです。
西　70歳で後継者はいらっしゃらないということでした。

西　小倉彫刻刃物製作所（埼玉県越谷市）、こちらはご兄弟です。兄の小倉成年（なるとし）さん、弟の小倉一哲（かずのり）さん。こちらも父が東京の滝口系統の彫刻刃物製造を学び、1971年に越谷で独立して、お二人が二代目。お二人とも後継者はいないということです。彫刻刃物、小道具、彫刻ノミ、電動彫刻機の刃まで様々な刃物を製造されている製作所です。
久津輪　自宅の前にプレハブのような建物があってその中でされています。
西　30年ほど前から彫刻刃物を扱っているお店が減少してきたので、ご自身で直販や行商に出られたり、ウェブサイトを立ち上げて販売を始めたと仰っていました。

彫刻刃物を作る際は金床の削り直しから行って、1本ずつ槌で叩きながら形を作っていくという、丁寧な作業で作られていました。

写真は刃物の形を押すための押し型です。こういうものを必要に応じて一から自作され、たくさんの刃物の形を作っていくそうです。

久津輪　こちらは電動彫刻機に取り付ける刃先です。
西　そうです。電動彫刻機の替刃、研いだらいくらでも使えると仰ってました。
久津輪　小倉さんは確か高山にも行商でいらしていたと思うので、ご存知の方や使っている方もいらっしゃるかもしれないですね。積極的に行商に行かれていて、今回もこの集会の直前におはがきをいただいて、3,000種類以上の刃物の展示販売をされるという展示会のお知らせをいただきました。京都市で4月8、9日に実施されるそうです。

久津輪　続いて福島県です。

西　清綱彫刻刃物製作所（福島県郡山市）の松丸一男さん、71歳。福島県郡山市の郊外に広い工房を構えていらっしゃいます。

久津輪　中がとても広かったですよね。

西　そうですね。松丸さんも滝口系統です。縁戚の方で、元は関東で機械関係の仕事をされていましたが、就業中に怪我をされたのを機に、奥様の故郷である福島に。怪我の治癒とともにお義父様の仕事を手伝い始め、仕事を覚えてこの彫刻刃物作りに就いたということでした。お義父様が滝口龍八さんとおっしゃるそうです。

久津輪　こういう彫刻刀をたくさん作っていらっしゃるのですよね。

西　はい。彫刻刃物を作る際に先程の小倉さんと同じように、形を押して作るための型が何種類も必要になるのですが、松丸さんは精度の良さが一番大事だということで機械屋にお願いをして、非常にきれいなものを作って揃えていると仰っていました。原料には、あらかじめ刃となる鋼と地金をくっつけて二層にした、利器材といわれる工業製品を使用することが主流だそうです。

久津輪　写真は幅1ミリの三角刀、それから丸刀ですね。

西　作る本数としては月間30本、それ以外は刃研ぎが圧倒的に多いということでした。刃研ぎは月間300本、毎日のように依頼品が届いているということでした。今回も調査中に刃物が郵便で届いていて、「こんな風に届くんだよ」と話してくださったのですが、中には研ぐのが大変な刃物もあって、清綱さん以外の刃物も受け入れているので大変だと話されていました。

久津輪　ゆうパックが山積みになっていました。どこから来るかと言うと、全国の木彫教室から。木彫の生徒さんが自分で研げない。三角刀の細いものなんて、なかなか研ぐのは難しいですよね。そういうのを先生がまとめてゆうパックで送ってくる。それが月に300本位。新品の製造が30本位だから、10倍が研ぎだねと仰っていました。ダイソーの彫刻刀まで届くそうです。こちらは木工設備もあって、丸い柄は自分で作っていらっしゃいます。四角い柄は他所の木工所に外注と。

清綱さんも70歳で後継者がいません。彫刻刀が作れなくなり流通しなくなるだけではなく、研ぎをしてくれる人がいなくなったら、「だったらもう木彫教室はやめよう」とか、そういうところに波及してくるのではないかと。木を彫ってものを作っていく文化のインフラが失われていく可能性があると感じました。

久津輪　ここまでが東日本でしたが、森田さん、どうでしたでしょうか。

森田　私は外に出て他の方々の仕事を見せていただくのが今回初めてだったので、鉋以外の全然違う仕事を見せていただいて、発見ばかりだったんですけれども。滝口系ということもあってなのか共通する部分は共通していて、そこから工法を進化させているのかなと全体を見ていました。

久津輪　ではここから西日本です。

西　今井義延製作所（京都市）の今井義仁さん、53歳。京都国立博物館近くの住宅街の中に、作業場兼店舗がありました。かつては、今井姓の鍛冶屋が京都に３軒あったとのことですが、今は1軒だけです。今井さんは彫刻刀物が中心です。義仁さんご自身は16歳から27歳まで11年間、長野県の刀匠のもとに修業に入られ、その後、京都に戻って家業を継がれています。他の鍛冶屋さんでもありましたが、音や振動が出る作業なので、町中でできないということで、京丹波町に工房を構え、そちらで鍛造や火を使う作業をされているそうです。彫刻刀物全般の生産のほか、中には京都ならではのお香を刻む香具セットや竹細工用の刀物、扇子の扇骨用の刀物、千枚漬けの鏑鉋など、京都の文化に則した注文があるそうです。現在はお父様と2人で製造されていて、お子さんも小さい為、今のところ後継者はいないと仰っています。

久津輪　店内奥の作業場でお父様と一緒に仕事をされています。私たちが調査に伺った時に、滋賀県高島市の伝統産業、近江扇子の骨を作る扇骨職人さんが刀物を注文にいらしていました。京都という伝統的なものがたくさんある街なので、いろいろな職人さんの道具を下支えしているのだろうと感じることができました。

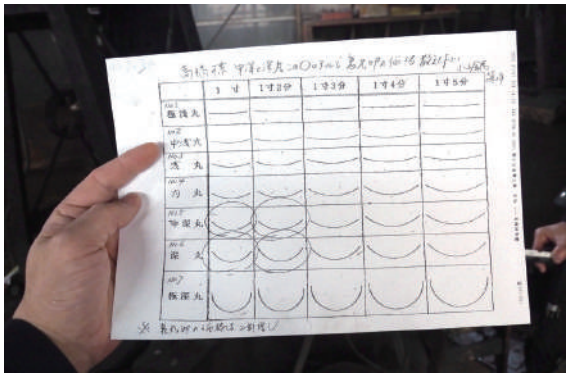
西　今井さんは学校にも納入されていますが、仏像彫刻、木彫などを学ぶ学生は就職先がなく、道具を買ってくれる職人さんがいなくなるのではないかと心配されていました。

久津輪　少し悲観的な感じでしたよね。彫刻をやる人も少ないし、道具もそんなたくさん買ってもらえるわけでもないので、いつまで続けられるかとお話しになっていました。

久津輪　ここから兵庫県の三木市。新潟と並ぶ道具鍛冶産地をご紹介していきます。

西　高橋特殊鑿製作所（兵庫県三木市）の高橋亮一さん、79歳。代々特殊ノミの鍛冶屋さんですが、彫刻刃物のほかに氷の彫刻の刃物や、下駄の歯に使われる十能ノミなどが高橋さんの代名詞と言われています。特殊ノミの仕事を代々していて、この仕事に入った時からずっと刃研ぎはご自身でされると仰っていました。後継者はなく、弟さんが67歳の時まで一緒に仕事をしていたが、弟さんの方が先に仕事を辞められて、現在はお一人でされています。弟子入り希望者は数十年前に来たけれども、一ヶ月保たないという状態だったそうです。

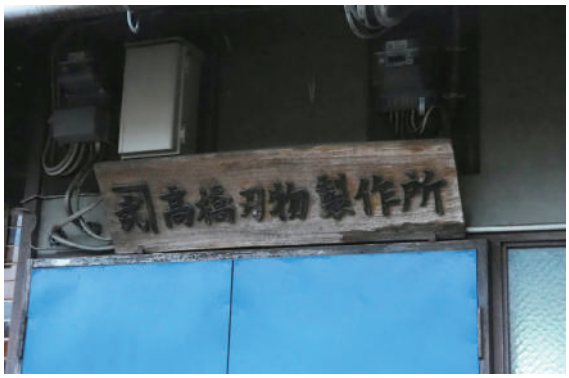
取引自体は、問屋と個人半分ずつ、個人は宮大工さんなどからのリピーターが多いという話でした。



久津輪　これは彫刻ノミのいろいろな曲がりの図面ですが、これだけ見ても、彫刻の刃物はいかに種類が多いかが分かります。それに対応しなくてはいけないので、鉋や大工ノミに比べると大変だという感じがしますね。

写真真ん中が下駄屋さんの十能ノミで、槍鉋も写っています。右側が船大工のツバノミ、一番下に写っているのがマキハダという和船の隙間に詰めるやつですね。そういう細かい道具も作っていらっしゃいます。

西　高橋和己特殊鑿製作所（兵庫県三木市）の高橋典三（のりかず）さん、60歳。屋号がカネタケさん。三と書いてカズと読むノリカズさんです。



現在、小信さんの廃業で一番影響を受けているんじゃないかということが、今回の調査で分かりました。現在、注文が殺到しているという話でした。先程の高橋亮一さんと従兄弟です。子供の頃からお父様の仕事を手伝って、鍛冶場に入って先手の仕事をしていたそうです。実際に鍛冶屋さんになられたのは30歳の時で、それまでは別の仕事をされていたということです。大学関係に彫刻刃物の一式を納められていますが、小信さんの廃業を受けて注文が集中しているという話でした。それ以前に、取引先が増え始めた頃にお父様が他界され、現在の大学中心の取引に絞ってきていたが、またここでそれ以上に仕事が増えてくることに頭を抱えているというお話でした。
彫刻刃物を手がける割合としては、半分が大工ノミ、3割が彫刻関係、2割が特殊ノミだそうです。これは作りかけの鏝(こて)ノミです。

久津輪　お父さんに先手を務めてもらっていたけれど、他界されたので変わった形のものは作りにくくなったと話されていましたね。

西　販路に関しては直販ではなく、問屋さんに任せている。自分は作ることに集中したいというスタンスでした。現在後継者はなく、ただ「こういう活動に関して、行政と現場をつなぐコーディネーターのような人がいたらいいんじゃないか」とか、「半官半民の鍛冶学校を創設しないと、この職業は残っていかないのではないか」というお話もお聞きすることができました。

久津輪　こちらが一番大変そうだなと実感しました。ひたすら狭い工場に座って作り続けていて、作っても作っても注文に追いつかない感じでした。今でさえそうなので、小信さんが本当に辞められたらどうなってしまうのか。ちょっと心配だったのが、すごい量のタバコを吸われるので、体を壊されなければいいけれど、と心配したりしました。もうお父様が亡くなって、「今自分の手を止めて教えるだけの時間もないんだよ」と仰っていました。「他に仕組みを作ってくれないと、自分のところで弟子を雇って、山のような注文を止めて、その若い人を教えるなんて無理だ」と。あと、1ロットあたりの注文数が減って、その分こまめに注文に対応しなければならないのも大変だということでした。需要が多かった頃は、1つの種類を50本100本作ればよかったのに、今は5本だったり10本だったり、挙げ句は1本だけ作ってくれみたいな。なかなかそういうことには対応できなくなってきたというお話もありました。

西　高昇鑿製作所（兵庫県三木市）の高橋資（ただし）さん、73歳。こちらも高橋系統の鍛冶屋さんで、先々代の高久鑿から独立したお父さんの跡を継がれた二代目。文化財関係の仕事が多く、美術院国宝修理所から和釘や丸太を割る専用の矢を作ってほしいという依頼や、岐阜県の小売店の依頼で鉋や刀の鞘師ノミの製作をしたこともあるということでした。

久津輪　小さな工房でしたよね。

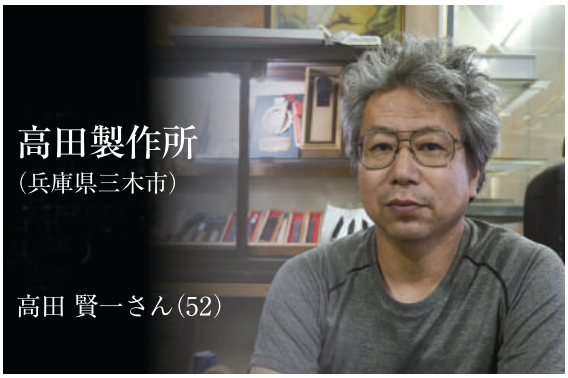
西　そうですね。所狭しと設備があって、その中にいろんな仕上げに対応しているので、磨き、ヤスリ、黒肌、ショットブラストなど対応する設備があり、ぎっしり詰まった工房でした。文化財系の方々から特注の道具や木型が送られてきて、それに対応したり。他の鍛冶屋さんで断られたために来る依頼も少なくなく、1本からでも費用が合えば作っているということでした。

久津輪　これもツバノミですね？長崎のペーロン競漕で、舟大工さんが使うから作ってくれという注文だったという話ですね。こういう文化財系の注文数の少ないものに親切に応えてくださっているのが、この高昇さんかと思います。高昇さんも73歳で後継者がいない、一体どうするんだろうというところです。

西　小山市刃物製作所（兵庫県三木市）の小山啓（ひろし）さん、76歳。事実上廃業宣言されていますが、少しだけ、まだ仕事をされています。

西　ここはとても広い工房で、大工ノミがルーツで、最盛期には家族も含めて6、7人がこの工場で働いていたそうです。この啓さんの代で、彫刻刃物をしていこうと決められたそうです。その頃、大工ノミの需要が落ちてきたので、京都の仏師からの依頼で彫刻ノミを作り始めたそうです。彫刻ノミを始める際に、東京の小信を見本にしたと仰っていました。やはり実績がない状態で、あなたも彫刻ノミを作るのであれば名前を差し上げましょうと仏師さんから認めてもらったそうなんですが、そこに至るまでに非常に苦労を要したとお聞きしました。体調の面から、今は受注を絞って新規は受けていないということでした。

久津輪　大きい工場ですが、もう従業員さんもいらっしゃらなくて、限られた種類のものだけ引き受けているということです。



高田製作所
（兵庫県三木市）

高田 賢一さん（52）

西　高田製作所（兵庫県三木市）の高田賢一さん、52歳。大工ノミの家系で、曽祖父の代に創業して、現在四代目。三代目のお父様の良作さんと一緒に製造されています。ユーザーからの要望で彫刻刃物を手がけるようになったとのことです。賢一さんは以前金属加工メーカーで働いていたので、いろんな刃物の型を自分で起こすことができます。幅方向に曲がった丸ノミ以外にも、前後に首が振ったものなど、特殊な刃物も安定して製造ができる強みがあります。

直販をお父さんの代から始めていて、三木では直販の先駆けとなった鍛冶屋さんです。販路を拡大するために様々な工房に直接行かれ、大阪の岸和田だんじりの彫刻工房や、各所の文化財修理所につながりがあります。平城京南門、薬師寺東塔の修理などの槍鉋の納品をされた実績があります。こちらも関西のいくつかの学校を含め、道具を納めた実績があります。ただ、後継者はいないということでした。

《 後継者育成について 》

久津輪　11軒の特殊ノミの工房を御覧いただきました。鍛冶屋さんの工房を直接訪ねるということはなかなかできないですし、直販されている方ばかりではなく問屋を通している方も多く、こうやって鍛冶屋さんの姿を見ることはあまりないのかもしれないですが、実際にはこういう方々が日本の彫刻刃物、質の良い刃物を担っていらっしゃいます。逆に言うと、もうこれだけしかいない。量産メーカーの教育用はありますが、注文に応じて作ってくれるのは、ほぼ、今お見せした方々かと思います。

森田さん、この後半の高橋系統の方とか、小山市さん、高田さんと同じ三木市内で仕事をされていますが、実際に他の工房に行く事はほとんどないのでしょうか？同業だから行き難いというのがありますか？

森田　今回の調査があって初めて場所が分かったとか、そのレベルで、ほとんど行ったことがないです。行ったことがあるのはほんの数軒で、それぐらいつながりがなかったです。修業期間中だったので、私が出て行かなかったというのもあるのですが。他所の仕事を見るとそっちに感化されてしまう心配があるので、今は集中してくれ、という教えに応えて出て行ってなかったのが大きいです。今回そういう意味で勉強になりました。

久津輪　鍛冶屋さん達ご本人も後継者を育てるというのは、そんなに簡単なことではないと言っていますが、三木というのは日本を代表する鍛冶産地であるわけで、兵庫県や三木市といった行政もそれなりに振興しようという思いはあると思うんですが、後継者育成というのは進まないですかね？

森田　私が入る前からそういう動きはあったと思うのですが、息子さんがいらしてもやっぱり継がない、継がせない、継ぎたくないとか言うのを聞くことが多く、なかなか次の世代に繋ぐのは難しい感じだと、私が弟子に入ってからもずっと見ていました。

久津輪　森田さんはこの三木の現場を見て、仕方ないと思われるのか、どうなのでしょうか？

森田　正直、考えないようにしていました。自分が口を挟めるような状況じゃないし、自分はどうするかということしか考えてなくて。また、それについては後で私の時に話すのですが、考えないようにしていました。

久津輪　西さんは今回調査してみて、何か感想はありますか？

西　自分は刃物を作れないので、刃物を買って鉋を作らせていただいているし、ノミとか探しても見つからない

ことが多くあったので、三木の鍛冶屋の皆さんにお世話になっています。この職人さんにお願いすると早く上がるとか、注文通りに上がってくるとか、難しくて断られるとか、いろんな側面が見えていたのですが、それがどんどん減っていくと、これから自分たちはどうやって刃物を広めていったらいいのかという危機感が、ずっとありました。あとは、こういうアクションを加速させていかないと、本当に今からやろうとしている、例えば道具を売ろう、広めようとしている人たちの仕事もなくなってしまうのではないかという危機感が強まってしまいました。

久津輪　現場を調査していると課題はいろいろ見えてくるのですが、私が感じたところでは「後継者を育てるそもそもの仕組みがない」というところが大きいですよね。高山には家具製作を教える学校はあるけれども、木工にしても曲げわっぱや桶・樽を作る学校はないわけで、産業になっていない小さな規模の木工というのは学校すらないんです。鍛冶屋さんに関しても学校がなく、職人さんは後継者育成を丸投げされているような状態で、ただでさえ需要が減っているのに、なかなか弟子が取れないというのが、まずありました。

《 柄や口金を作る職人の減少 》

それから鍛冶屋さんだけに限らず、柄を作る人とか口金を作る人とか、そういう人たちが激減しているという状況もあります。

例えば、兵庫県三木市ではノミの柄を作るところが２軒だけ。みんながそこに集中して、その柄屋さんの前に行列ができているという状況です。なので、問屋さんがいくら注文を抱えていて供給したくても、柄で止まっている。その問題をどうするか。口金も日本で１軒しかない。新潟と兵庫を含めても１軒しかないのです。

《 原材料の不安 》

原材料の不安ということで、鋼や地金などノミを作る材料というのが入手し難くなってきている。かつては問屋さんがあって、いろんな幅や厚みのものをあらかじめ切ってくれて、職人さんが使いやすいサイズで買うことができたのですが、それがもう売れないから、ある程度のサイズに統一されてしまって、鍛冶屋さんでは叩いて延ばすことに時間がかかったりとか。

そもそもの問題として、それらの鋼材を作っている日立金属という大手が、業態再編の中で金属部門がアメリカの投資ファンドに売却されるという話もお聞きになっていると思います。売却された後、鋼が作り続けられるかどうか、まだ誰にも分かっていない不安もあります。

《 流通の仕組み 》

最後に流通の仕組みですが、お店が減って、道具の性能や品質を伝えられるプロがいなくなってきている。だから、鍛冶屋さんの中には直販に乗り出す方もいらっしゃるのですが、直販は直販で作る時間が少なくなってしまう難しさがあって、本当に必要としている人にどう届けるのか、転機になっている気がします。

（休憩）

6. 千代鶴貞秀による小信での研修

久津輪　千代鶴貞秀、森田さんの東京の小信、齊藤さんでの研修の話に入らせていただきたいと思います。

もともと森田さんと私が最初にお会いしたのが4～5年前、この調査の初めの頃ですよね。鉋鍛冶を兵庫県三木市でされていて、その当時千代鶴貞秀の三代目を襲名したばかり。岐阜県関市出身だということで、親しみを持って話を聞かせていただきに伺いました。データブックの表紙にも写真を使わせていただいて。森田さんと最初に話をしたときに、失礼ですけどどこか鍛冶屋さんらしくないところがあって。自分の仕事の事だけ考えているんじゃなくて、日本全体のこととか業界全体のことを考えながら行動している人だなと。鍛冶屋さんというものの存在を、これからしっかり確立していきたいというか、伝えていきたいという思いで活動している人だなと思っていて。それで今回の彫刻刃物に集中して調査を始めていく中で、森田さんに相談をしてみたんです。12月と1月に仕事を休んで、鍛冶屋さんの調査に一緒に行っていただき、調査メンバーの一員になっていただきました。

この写真は、12月に小信さんに聞き取りに行った時のものです。この場で「もし許していただけるなら研修させて欲しい」と森田さんの方から申し出て、それを受けてもらって、2月に実現しました。ここからは森田さんによる小信調査報告をお願いします。

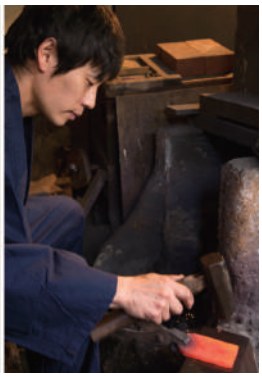
森田　今回この調査に関して、廃業宣言されてお忙しい中、受け入れてくださった小信さんに、この場を借りて感謝申し上げたいと思います。ありがとうございます。

研修には2月17日から23日まで7日間、行ってきました。私が小信の彫刻ノミと出会うきっかけは、学生の頃彫刻をしていたのですが、その時の先輩が小信のノミを持っていて、その名前を知りました。でもやはり学生だったので、道具を買うお金というのがなくて、他のノミを使っていたのですけど。なので、使いやすいとか、どこがいいのかというのは知りませんでした。

森田 直樹

1978年　岐阜県出身
2001年　彫刻専攻 卒業
2004年　弟子入り
2008年　千代鶴直秀
2017年　伝統工芸士
2019年　「三代目 千代鶴貞秀」

・鍛冶屋歴20年
・鉋、小刀など
・他 産地工芸士とのコラボ、作品展



私の簡単なプロフィールですが、小さい頃からものを作るのが好きで、大学では彫刻を専攻していました。塑像、石、木、鉄もちょっとやりましたけど、いろいろやらせて貰いました。隣が金属工芸の研究室で、土屋俊典先生という方と出会って、千代鶴という名前を知るきっかけとなったんですけども、金属全般、鍛金、彫金、鋳金、その時遊びがてらいろいろやらせてもらったのが、今の仕事に就いたきっかけになったと思います。その後、就職をせず契約社員として働いて、ずっといろいろ勉強をしていました。その後1年ほど、美術の勉強をしてきたので海外の美術館の本物を見ておきたいとバックパッカーとして放浪して、世界各地の美術館やその他の仕事場を見て回りました。地続きで中国まで回って帰ってきました。その後仕事をしながらも、ものづくりをしたい気持ちは変わらず、今度は日本のいろんな産地を見て回り、岩手県の南部鉄器とか新潟の三条、与板とか。最初に出会ったのが与板の河政さん。そこで曲がっているノミとか製作の現場を見せていただいて、夜までお話を聞かせていただいたのが最初の出会いです。その時、三木に千代鶴さんがいるという話を聞いて、真っ先に学生の時に聞いた話を思い出して、話を聞きに行ってみたいと伺って、そのまま弟子入りをします。それから千代鶴直秀という名前をいただいて、その後12年の年月が経って、伝統工芸士の資格を取り、2019年に三代目千代鶴貞秀という名前をいただいて今日に至ります。この仕事を始めてから20年経ちます。私の製作は鉋、小刀、そのほか他の産地の伝統的工芸品の工芸士さん、指物とか布関係、飾り職人さんなどと

コラボをして、作品展や個人として出したりしています。他の産地の工芸士さんとコラボを何故していたかということなんですけど、直秀の名前をもらって、師匠から外に出させてもらえることになって。いろいろな場に行ってみて、様々な産地の工芸士さんたちと会って思ったのが、どの仕事でも刃物は使う、でも、この人たちが使っている刃物がなくなったらどうするんだろうと思って、それを調べるためにいろいろな方と繋がりをもつようになりました。そして、刃物づくりを担っている人たちがいないというのを知ることになります。

伝統工芸品や文化の根っこを支える仕事を、自分達は受けているのだと思うようになりました。

小信での研修を受けた動機なのですが、修業期間が明け、三代目を襲名したことによって、時間を自分で管理することができるようになったので、他の職人さんの仕事を見に行けるようになったというのが一番大きいです。

その他には、もともと私は彫刻を作る方だったのですが、作品を作るよりも、もっと実感がある仕事の方に興味があるというか。作品を作るのは自分の思いを入れるという作業が必要になりますが、一作一作に常に入れていく創作パワーが私にはなかった。それよりも、ものづくりの為のものづくり、根源的なものに惹かれていったというのが大きくて、それを考えた時に道具に繋がっていき、そういう仕事に就きたい、そういうものづくりに自分の身を置きたいと思いました。

小信さんがいろいろな方から評価を受けながら仕事をされていたので、今回、考え方や仕事内容に触れられる機会になるんじゃないかと思い、ダメもとで研修を申し出てみました。それを小信さんが「じゃあ、やってみましょうか」と仰ってくださり、今回の研修になりました。

これからお話するのは、私はまだ年数も経ってない職人なので、それをベテランの方に対してあれこれ言うのは申し訳ないのですが、皆さんにお許しいただいて。

《 千代鶴工房の技術継承について 》

特に教え方というのはないのですが、見る・聞く・まねる、この3点にまとめられると思います。弟子入り当初、1ヶ月ほどは仕事をただ見るだけです。後ろに張り付いていたり、どんな角度で見ていても師匠は怒りません。

その後、「ちょっとこれをやってみるか」ということで、研磨仕事から手伝いを始めました。ケガの少ない仕事から始まり、ヤスリやセン仕事、押さえ金の火造り、鉋の鍛造、最後に焼入れと順番にやっていくことになりました。銘切りは組合の後継者育成事業があり、うちの銘切りをお願いしていた方が指導に当たっていたので、そこで指導を受けました。研ぎは時間が空いているときに独学です。

背後から見る、まねる、音を聞いて同じ音を出せるようになるとか、同じセンくず、切り粉が出せるようになるとか、師匠とシンクロすることを目標にやっていました。同じことができれば同じものができるというのが基本の考え方で、私が勝手に考えたことですが。「同じことせえ」と言われていたので、そういうことだろうと。当時、なぜこういう作業をするのかと質問をしていたのですが、これが喧嘩になるもとで。「そんなこと考えるな」ということが多くて、あんまり説明がなかったんですね。説明してくることもあったのですが、今思うと「言語化しすぎない」というのも重要かと思いました。「これはこうだよ」と言ってしまうと、「こうだ」と思ってしまう。それはすごく危険で、疑問をはさむ余地がなくなってしまう。自分で「こんな感じかな」と思っておいて、そこから「違うかもしれない、ああかもしれない」という試行を貯めていった上で、自分の最後の筋を決めれば良いと思うので、余白のある考え方の方が良いと今では思います。

失敗は必ずするのですが、失敗しても怒られませんでした。1本20万円くらいする小刀を、焼き入れ後の歪みとりでバキッと折ったときも、「うわっ」で終わって、じゃあ次またやろうかとなるので、そんなに怒られませんでした。ただ、同じ失敗や何も考えていない失敗はすごく怒られました。2回目に同じような失敗を考えないでしたときは怒られました。「大体俺は3回くらい怒るで」と言われていたのですが、やりすぎて怒られ、やらなさすぎて怒られ、真ん中くらいにきて怒られなくなると。教えるための紙のマニュアルを師匠は持っていたわけではないですけど、一対一でやっている中で「こいつはできるな、できないな」を師匠の方も考えてくれていて、常に気にされていたな、と。今でもそうです。

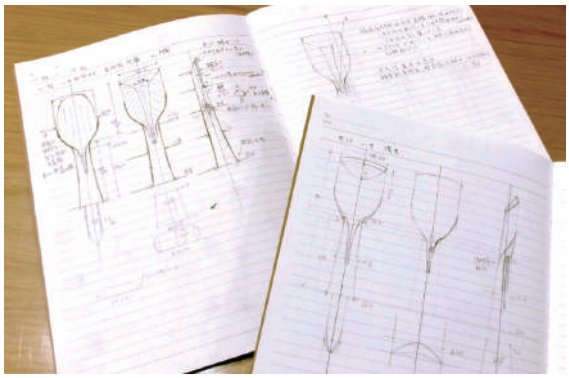
《 鉋鍛冶とノミ鍛冶の違い 》

鉋鍛冶とノミ鍛冶の違いですけど、大きく分けると三点。形、種類、治具。形はくびれなどがあって立体的だということ。製品の種類もノミ鍛冶の方が圧倒的に多い。鉋では役物といい、内丸・外丸・五徳・際とかいろいろあるが、種類はノミ鍛冶の方が圧倒的に多い。それに関わる治具でも、砥石とかバフとか細かい作業工具が圧倒的に多いというのが、鉋鍛冶との違いかと思います。

《 事前準備 》

小信さんが仕事を辞めますと言っている中で、無理にお願いをして研修しに行く中で、棒立ちで見ていたくはない、せめて「この人来てくれて良かった、言いたいことが言えた」と思ってくれたらいいと、まず失礼のないように臨もうと思いました。そのためにできることは事前に勉強することしかなくて、12月から2月の準備期間で何ができるか考えた結果、知らないことを減らす、基本のきは押さえる、小信さんに「作ってみますか？」と言ってもらえる状態にしておきたいと。まずそこまで行こうと思いました。

美術院の門脇さんから彫刻ノミを2本お借りして、まったく同じものを8本、事前に試作しました。写真はそのうちの6本です。大半は小信さんのやり方をYouTubeを見ながら製作しました。ヤスリや音、リズムを聞きながら。門脇さんから更に追加で50本ほどお借りしたので、朝昼に仕事をして帰ってきたら、夜は小信さんのYouTubeを聞きながら、寸法を採って図面を引いてというのを、ずっとやっていました。描いていると分かってくることもあり、描いた上でさらに試作をして、試作と現品と比べて、比べたことを書いて、を繰り返して6本作りました。



試作するのに治具が必要だったので、手元の道具をひたすら探して、研磨砥石、ヤスリ、バフ、できる限り狙っているものができるよう、道具を揃えつつ製作しました。で、本番の研修に入っていきます。

久津輪　ちなみにYouTubeは美術院の佐藤元彦さんが撮影したものですね。検索すると出てきます。

《 小信さんの一日 》

小信さんの一日

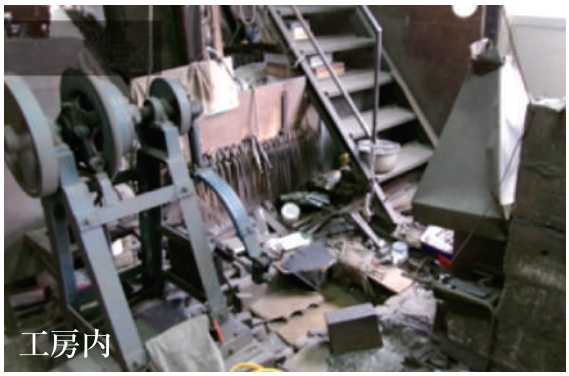
8:00　電話・FAX・メールチェック

15:00　コーヒー休憩

17:00　終了
～19:00

8時開始、FAXやメールなどチェックすることから始まって、15時にコーヒー休憩、17時頃終わり。
研修中は焼入れがあったので、日が落ちてからやろうということで、19時頃からやりました。個人的には、小信さんがPCを立ち上げると画面に「KONOBU」と出てきて、憧れのところについに来たのだと感動していました(笑)
小信さんでの研修に関しては、もう完全に見ていこうという気持ちでいました。

これは工房の中です。長細い工場で、奥が研ぎ場、真ん中が鍛造場ですね。



ここで火造り、鋼と鉄をくっつけてから焼鈍までの一連の流れを火造りと言っているんですけど、それと手前に別の炉があって焼入れ。

これが研磨をしている場所です。砥石がいっぱい置いてあって。真ん中の木の板が擦り台で、ヤスリで擦る時にノミを固定するところです。

これが治具で一番多い、研磨砥石、バフ、形に合わせて丸だったり細いものだったりが置いてあります。鉋鍛冶の10倍以上ありました。鉋鍛冶は砥石が3つか4つあれば事足りるんですけど、彫刻ノミは深・並・浅・極浅・極深などあるので、その分だけ砥石やバフが要る。これに写っていないですが、二厘・三厘の裏を擦るような砥石もあるので、かなりの量になります。

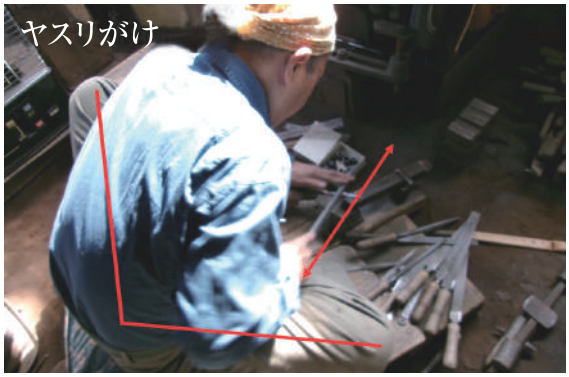
初日、小信さんに自作したノミを見てもらいました。小信さんは「うん、うん」と言っているぐらいだったので、このぐらいで良かったのかなと。

ストーブに置いてある木の物はクワエと言って、ノミの穂を挟む治具なんですけど、それも作ってみました。私が他の所の調査で見たものより小信さんのものは大きかったのですが、自分用に作らないとと思って寸法採りなどもしていました。

研修に入っていくのですが、基本は千代鶴の工房でしていたのと同じです。まず背後から見る、小信さんの視線や道具の持ち方などを意識したり、音を聞いて仕上がりの感じをイメージする、叩く音のリズムを確認する。上手くいっている時は当たり前すぎて本筋が見えてこないのですが、失敗している時、こう直さなきゃという時が一番勉強になる。上手くいってないものに対応していくときが、直していく過程やゴールが明確にわかるので一番勉強になりました。

角やすりで、ノミの穂の部分のシノギを削っている写真。この時自分がどこを見ているかというと、足元。この作業をするときは基本裸足でした。冬でも。私も裸足になってやりました。そうしないと固定できないので。道具は横からハシを使っているのですが、もう1つ、ヒッカケという道具があって、これを使った上でハシで挟んで固定している。

ヤスリ掛けの写真。さっきとはノミを置いている向きが違います。足の置き方も違います。その部分も見ているのですが、どういう固定の仕方をしているか見たら、下に台を置いて浮かせている。背後から見つつ、いろんな方向から見て立体的に作業者を捉える。技術の像を自分の中で作っていくということをしていました。



ヤスリがけの時は、脚の角度とか、脚の高さ。小信さんは窓に向かってやっているので、背中しか見えないのですが、脚が左右対称かと思ったら、ちょっと傾いて座っている。ヤスリを擦っている時のストローク、肘の動き方、脇の締め方などを見ていきます。

持っている右手の指、それを支える左手。自分がそういう持ち方をしていなかったので、家に戻ってからやってみると納得する部分がありました。ヤスリを使う場所、先を使うのか真ん中を使うのか。どういう風に足で持っているのか、それから動画でないと分からないが、足で挟んでいるクワエ(木の治具)をぐるっと一周足で回していく。そうするとヤスリをかけていった時に、最初から最後まで同じ力でヤスリの細かい筋が一周つながるのが綺麗なんだと。そういうのをやっていました。

小信さんのノミは刃先と肩の方にかけて厚みが違います。このようにヤスリの細い面がラインになって見えてくる。ちょっと開くような感じ。直線になっていると全部同じ厚みになっていく。開いていくことによって肩の方が高く厚くなって、開いた刃先の方が薄くなっていく。それを目安にしてヤスリをかけていました。

久津輪　小信さんの彫刻ノミはそれ自体が彫刻みたいだと言っていましたよね。

森田　そうです。小信さんに教えてもらっていると、学生時代に彫刻の先生に教えてもらっている時と同じことを言っていました。すごく久しぶりの感覚、20年以上前に彫刻を勉強していたときの感じでした。

これは何ということのない道具ですが、曲がりノミの曲げ道具。太い溝が2本あってそこで曲げていくのですが、矢印の所の細い溝は何ですかと聞いたら、細いものを曲げる時、刀（とう）などを曲げる時はこの溝を使うんだよと。一見するとただの木のかけらなのですが、細い溝も重要だったりして、こういう細かいところを聞いていかないと調査にならない。

杵。これが形打ちをする時に一番重要なものなのですが、この写真に写っているだけで40個、これが3〜4倍ありました。下に受ける台の方も、いっぱいあります。これを駆使して1対1で合わせるのではなく、違うものを当てていったり、作ることを工夫しています。

小信さんの仕事スタイルは産地のような量産ではなく、お客様から注文を受けたらそのお客様の分を仕上げていきます。だから種類がバラバラです。ノミを作って、小道具を作って、刀を作って、全部その人の分が揃ったら出荷、で、次にいく。お客様の顔を思い浮かべて仕事をしているなというのを感じました。お客様の仕様に合わせてメモが残してあって、このお客様はこういう好みで作っていて、前にこういう注文が来たから前と同じようにやろうかとか、違うように言われたから変えようかとか、そのように仕事をしていました。

久津輪　直接取引ならではですね。

森田　今回の研修では、火造りからヤスリ、研磨、焼き入れ、戻し、柄付け、研ぎ、全部の工程を見せていただくことができました。これは火造りなのですが、まず帳面を見て、この道具を作る時はこのサイズで、というのを見ています。

そこから叩いて作っていくんですけど、これは鍛接、鉄と鋼をくっつけている作業です。

私も向槌を打てますので、2人でやらなければいけなかったら言ってくださいと言って、先手、向槌を打たせてもらいました。2人でないとできない作業があったので、それをやらせてもらいました。切断する時に2人でタガネを使って切らないと物にならないというのがあったんです。それを一緒にやらせてもらいました。

「これ、お客様から言われてたやつ、森田さんが来てくれたから良かった。作れるからお客様が喜ぶ」と。小信さんの製品が1つ増えたから良かったと思いました。

そうこうしていたら、「今度は森田さんやってみる？」と言われて、今度は小信さんに先手をしていただいて、私が丸ノミを作ることになりました。型を打てばいいと思っていたのですが、実はそうではなくて、ちゃんと手順があることを知ることができました。

製作物

結局、作ったものはダメと言われて、続きをせずに別の物を作ることになったのですが、何がダメだったかというと、この凹み。ちょっとだけ首の部分から穂先に向かう途中で段がついている。この時点で小信さんから「うちの製品にならないからやめましょう」と言われて、やめました。小信さんの仕事はヤスリ仕事だと思っていましたが、最小限の構造、形状にしていくことが、機能とか重量とか使い勝手に影響していることを感じました。多種多様な注文に応えるために、軸、穂、芯の取り方など～刃先に中心線を合わせるのか、私達はハシリと呼ぶのですが、シノギ面の元の方に芯を取るのか。軸の太さ、柄の太さまで、お客様１人１人の癖や使いやすさに対応して、常にそこを気にしてものづくりをされていました。

これは私が擦ったものです。小信さんに「じゃあ森田さん、これを作ってみますか？」と言われて、お客様に渡す製品を私が作っています。この形でやってくださいと言われて、20年やっている職人だと思ってくれていたのが嬉しかったのですが、やってちょうだいと言われたら放ったらかしです(笑)。そうなのですが、うちの師匠と同様で背中ですごく音を聞かれていて。最初にヤスリを当てていた時に、10回擦ったあたりでぱっと振り向いて、「森田さん、行きと帰りが同じ力になっているよ」といきなり言われて。私も緊張していたのですが、背中で全部聞かれているので、その後のヤスリがけができなくなってしまうぐらいに緊張しました。それでも食らいつく感じでヤスリをかけて、小信さんどうですかと聞いたら、「これでいいですよ」と言って製品になったので、お客様のところに何個かは行っていると思います。

これがさっき失敗したので、別に作らせてもらった五分の丸です。込みの形状など、最初に私が図面を引いた時には分からなかったので、どういう感じで作っているか聞いたり、肩のヤスリの取り方とか…これは左右対称になっていないなと、今写真を見たら分かってしまうのですが。これは小信じゃないとまでは言われなかったですけど、そこまで行っていないという感じの仕上がりでした。

《 感想 》

感想としては、1週間では時間が足りなかったです。行く前の1ヶ月は頭に詰めてパンパンになった状態で行ったのですが、1日1日話を聞いてノートにまとめて持って帰り、何を言っていたかを整理して追加で書き直して、それを１週間続けていると頭に入らないぐらいで。自分がもし作ることになった時に、治具を揃えたらできるだろうなと思う範囲もありますが、それにも増して情報量があまりにも多くて、自分がパンクしそうになりました。1週間は自分としても限度だったなという感じでした。１週間は短かったけれど、めちゃくちゃ長かったです。帰る時に1ヶ月ぐらいいたんじゃないかと思うぐらい、時間の感覚が分からなくなるぐらい学ばせてもらいました。

種類が多いのは感覚では分かっていましたが、1人の職人がこれだけの種類をつくってきたのだという驚き、この人がいなくなった時に消えるものがすごくあるのだろうと感じました。

次は治具ですが、私がやるという設定で道具を揃えていく時に、現地で見た細かい治具を一度に揃えるのは無理で、これは小信さんとも話したのですが、まずは必要なものから順に買っていこうと。ネックなのは補助金を受けられないことです。自分が必要なものから買っていくので。一気に設備を揃えようとして補助金をもらうことはできますけど、ハズレを買ってしまうことになるから、自分が出す経費も大きくなるので、しょうがないです。1つずつ買うしかない。でもそれは、私に信頼があって作って欲しいと言われないと始まらない。自分で作ってみて評価を得ないと、今後続けたいと思っても道具の世界はシビアなので、信頼を得なければ始まらないと感じました。

小信さんも50代のときに師匠が亡くなり、その頃一番苦労されていたと聞きました。すべての技術を教わったわけではなく、注文を受けたときに、その都度試行錯誤したと聞いています。最終的に作れないものができたときというのは試行錯誤しかない。やれるかやれないかの感覚は、仕事を経験している年数が長くなるほど分かる、その辺りの感覚を研ぎ澄ましていくことが必要だと思います。(経験が少なくても)できなくはないかもしれませんが、手数が多くなるとか、アプローチが変わるということはありうると思います。

そして、使う人があっての仕事です。ユーザーさんからのこの形がいい、こうしてほしい、この切れ味が良かったとかの声があってのもの。たとえば、鎌倉彫で椀の外周をぴったり彫るために、四分なら四分のノミで1周彫った最後に、彫り跡がピッタリつながるという仕事をする人たちが、小信さんに「もうちょっとこれを広くしてくれないか」と言う。もうちょっととは、ほんの気持ちなんです。ミリ単位の話で。すごくシビアな仕事だと仰っていました。

使用者と同じ目線でのものづくりの仕方を大切にしないといけない。小信さんの先々代、お客様と直接取引にしようと言ったのは、このためだと思う。金額的な面もあるかもしれませんが、お客様と意思疎通ができなければ仕事にならないと、正直思いました。

お客様とは意見を言い合う場所になると思いますが、私に限って言えば、言ってもらった方がいい。たとえ喧嘩になったとしても、分かり合えた方がいい。私はもともと物を作る側から道具を作る側に移行したので、ものづくりにとって道具は、思考を実体化するにあたって、なくてはならないものなので。使用者の手となり目となり、シンクロできなければ仕事にならない。それを助けるのが自分達の仕事だと思っている。そういう点で、密に使用者と道具の製作者が連携を取らないといけないのだと感じました。

最後に、伝統を受け継ぐこと。千代鶴に関してもそうですが、受け継いでいくときに、全部を伝えきれるのか。いや、伝えきらないで、むしろ余白を残しておくべきなのか。技術的な継承という意味では、試行錯誤する余白は常にあった方がいいのかとも思う。

今回小信さんが辞められるにあたり、人材育成の面に視点を変えてみると、1人の人間が小信さんの仕事を覚えるには、10年以上かかるだろうなと思いました。ものができれば、ということなら数年でできるでしょうけど、お客様との付き合いとか、意思疎通とか、微妙な言葉の綾を理解して物に反映できるようになるには、相当な年数がかかると思います。

私たちの仕事はお客様があってなので、そこがないと維持することはできません。自分の仕事以外でも、伝統とか長く続けられたものとは何だろうと考えると、製作に関わってきた人たちの生き生きとした営みによって、結果的に長く続いてきたのだろうと感じています。今度はあれをしようとか、ものづくりは楽しい、ワクワクするとか、あの人に勝ってやろうとか、前向きな意識、より良いものをつくる意識がものづくりに反映されて、継続につながっていったのだろうと。自分もその一端になれたらいいと思います。

冷たい言い方になるかもしれませんが、私自身、伝統を守るとは思っていなくて、守りたいともあまり思っていなくて。多分、その言葉を使うと守れないと思うのです。試行錯誤とか、前向きに、生き生きと、俺はこうしてやる、という気持ちが継続に繋がると思っています。私は守るためにこの業界に入ったとは思っていなくて、自分が作りたいものを体現するために、好きでこの仕事をやっているので。なくなるときはなくなるし、使う人たちとのやり取りの中で、最終的な答えを出さなければいけないなとは思うのですが、小信さんの後継者問題もありますが、帰ってきて、今度は私が後継者を探さないといけない、立ち位置はまったく一緒です。使用者とのやり取りがなくて、楽しさがなくなったときは、私も仕事を閉じないといけない。そういうときが来ないことを祈りつつ、私は私の道を行く。助けを求められない。来るものを受け入れる立場。鍛冶屋は斜陽産業と言われるが、私自身は斜陽とは思っていない。可能性があると思ってこの道に入ったので、私はそれを体現していくのみ、です。どうもありがとうございました。

7. フリーディスカッション

久津輪　彫刻刃物の調査をやってきて、齊藤さんという超一流の鍛冶職人さんと、それを使ってきた美術院の門脇さんという超一流の使い手の人たちの話を聞いて感じたのは、森田さんが言っていたのと同じようなことなんですが、本当に道具の製作者は伴走者というか、二人三脚というか。これから先は需要も少なくなるし、機械化して量産すればいいじゃないかと。量産もできなくはないと思うんですが、種類はだいぶ少なくなるとは思います。しかし、作り手が最高のものを求めようとしたときに、そこに伴走してくれる道具を作る人がいないと、最高のものって生まれないと思うんです。それは単純に技術とか形とかデザインとかというものではなくて、道具には何かがこもっているような気がしたのです。道具において、相当レベルの高いことが、この日本という国では行われてきたと思うのです。このレベルをできれば落としたくない、続けていきたいなと、この調査をしていて思いました。小信さんの廃業というニュースに接して、何ができるかと考えたときに、一からお弟子さんを入れられなくても、ひょっとしたら今回のように、基本的な技術を全て身に付けた中堅の人が短時間でも行けば、その中の一部分でも受け継ぐことができるのじゃないかと。きっと森田さんも同じように思ってくれたのだと思いますけれども、多分森田さんが言っていた通り全部受け継ぐというのは無理だし、森田さんという人のベースの上に小信さんという一枚が加わって、新しい形で継がれていくといいのかなと、そういうことができるといいなと思いました。

新潟からお越しいただいている水野さんも、70歳にして後継者の似鳥さんを迎えられたという、その取り組みについてお話しいただけたらと思うのですが。

客席より 水野 清介さん　まさかこんなところで話せと言われると思ってなかったので、何を言っていいのか見当がつかないのですけれども。私は60年近く鍛冶屋をやらせていただいてます。親から教わったのは、「この世に残らない刃物を作れ」ということなんです。「値段はどうでもいいからとにかくこの世に残ってはいけない、使い切ってもらえる道具を作れ」と教わっただけです。今どういうわけかうちに1人弟子が来ています。何を教えればいいかと最初思ったんですが、最初から高いものを作らせようと。安いものをやると失敗してもいいという頭になっちゃう、だったら最高級品を作らせれば、これ1枚ダメにしたら何万だぞという覚悟から入ってもらう。今それで3年になろうとしています。とにかく刃物は切れなきゃいけない、いろんな刃物を出せれば良いけど、鉋をまだまともに作れてないので、とにかく一生懸命鉋を作っていきたいと思います。

久津輪　似鳥さんからも一言いただけますか？

客席より 似鳥 透さん　今2年半ぐらい修業中です。いろいろ最初からやらせてもらっていて、今回も良い刺激を受けたので、帰ってからも頑張ってやりたいと思います。

久津輪　富山県の井波彫刻の町から彫刻刀の専門店・匠雲堂の岡田さんがいらしています。岡田さんも事業継承者がいらっしゃらなくてずっと探していて、鍛冶屋さんも高齢化していることを憂えていて、何とかしたいと取り組んでいらしたのですが、最近その事業継承者の候補が見つかったということで、これからどういう活動をされるのでしょうか。

客席より 岡田 榮吉さん　今日の話を聞いて現実が明らかになったと思います。うちも同じ状況だったのですが、継業者の人が現れて。うちは刃物販売、メンテナンス、研ぎ、鞘付けなどをこなしてきたのですが、ただ刃物は外注加工で、今は埼玉の高橋和彦さんが主に作ってくれているのです。高橋さんが後継者がいないということで、高橋さんが辞めたらうちも廃業というシーンが見えてきたところなのです。それでは東京芸大とか金沢美大とか上松技術専門校とか、利用していただいている方に大きな迷惑をかけてしまうことになるので、なんとか続けるために匠雲堂の中に鍛冶屋部門を取り込もうと高橋さんに話したところ、自分の持っている技術は100%伝えますと言ってもらいました。みっちり弟子入りしなくてもインターネットの時代なので、通信で的確に伝えることができる。失敗は技術の積み重ね、技術を磨く方法だと思っています。だから後継者の村上には失敗してもいいから、自由に思いっきり鍛冶屋を楽しんでもらおうと思っています。使い手と作り手は二人三脚だということですので、ぜひ皆さんに教えてもらいながら何とか鍛冶屋に育てあげたいと思っています。村上は4月から来ることになっていますので、お声掛けいただければありがたいです。村上は京都の大学で仏像彫刻を勉強したあと就職したのですが倒産したため、先月まで自衛隊にいました。これから彫刻分野を守るために力を尽くしたいと決意しています。よろしくお願いします。

先ほど森田さんも言われましたが、個人の能力もありますので、技術を正確に100%受け継ぐのは難しい。それよりも、村上は村上なりの刃物づくりを確立していく方が近道だと思っています。無理して真似しようとすれば、そこに到達するには何十年とかかりますけれど、自分なりのものを作れれば、早く育てられる可能性がある。その分、みなさんに育てていただく必要があると思います。

久津輪　この高山は使い手が一番多い町だと思っています。使い手が多い町にできることがきっとあるはずだと思っているのですけれども、どなたか高山の方でお話になりたい方いらっしゃらないでしょうか。一刀彫の鷲塚さん、いかがでしょうか。

客席より 鷲塚 浩さん　一位一刀彫の鷲塚です。道具を使わせていただく立場ですけど、いい彫刻刀を作っていただくには、使う側にも活気がないといけないと思っています。僕ら彫刻を作る側が、活気を持ってエネルギーを持っていいものを作るとか、たくさん作るとかそういうことが盛んになってくれば、作る人も増え、使う人も増え、道具が求められる、そういう循環ができると思います。まずは僕らが第一線で頑張るのが、一番良い循環を生む足がかりになるかと思います。自分は今まで一生懸命やってきましたが、今回のシンポジウムを伺って、10年、15年、20年と、充実して仕事を続けていきたいなと思いました。

久津輪　日本の木工文化を盛り上げていけるのは本当に高山だと思っているので、ぜひ高山の皆さん、この地で何かできることを一緒に考えていければと思います。本当は皆さんからお話を伺いたいところですが、時間がないので最後に私の方から。

私は自分が仕組みづくりをする役割の人間だと思っているのですが、これからどんなことをしていく必要があるかということを、簡単にお話しさせていただいて終りにしたいと思っています。

文化庁に行った時に、「美術工芸品保存修理用具・原材料管理等業務支援事業」を2020年に立ち上げた話を聞いてきました。現場に聞き取り調査に行くと、職人さん達は「行政が何もしてくれない」「国が何も動いてくれない」と仰る方もいるのですが、国は国でいろいろな調査をして、何か必要なことがあれば使ってもらえるように制度を作ってはいるのです。それがなかなか繋がっていないという現状があります。文化庁がやっているのは、国として守らなければいけない日本の文化に関わる材料とか道具は、ある程度国の税金で見ましょう、という制度です。個人の場合は70%補助、団体の場合は50%。これがいま何に使われているかというと、和紙を作るための楮や、漆などを生産者の方から買い上げるお金などです。楮や漆などの伝統工芸の原材料は、商品作物としては成り立たないのですね。じゃがいもやにんじんを作った方が、楮を作っているよりも利益になる。しかしこの原材料ができなくなると、いろんな日本の文化が守れなくなるので、国として守っていく仕組みを作ったというわけです。だけど、こういう仕組みがなかなか現場まで届いてない現状があります。

一つ参考になる団体かと思っているのが、(一社)日本文化財漆協会という団体で、もう50年も前にこういった団体を作っている。漆掻きはもともと農業の一環としてやられたり、専業の方がいたりしたわけですけれども、早くから人間国宝の人たち、東京藝術大学出身の人たちが中心となって団体を立ち上げて、まずは中国からの輸入に頼っているけれども、日本の漆を植えないとだめだよねということで、漆の木を植えはじめて、更には漆の精製や刷毛を作る技術研修などを続けてきています。そういう団体に対して、選定保存技術保存団体という文化庁が認定する制度があって、この団体も認定を受けて千万円単位の補助金が下りて、植栽や研修に使われています。だけど、鍛冶屋さんにはそういうものがなかった。鍛冶屋さんだと、例えば越後与板打刃物という経済産業省の伝統的工芸品という指定で、展示会の補助や後継者育成費用も多少出たり、森田さんのいる三木だと播州三木打刃物という指定があって、経産省の補助が受けられる。産業としての振興策はあるけれども、文化としての振興策を鍛冶屋に関してはしてきていなかった。

ご存知の方も多いと思いますが、2020年に「伝統建築工匠の技」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。今日の会場であるこのような日本を代表する木造建築の技術を、丸ごとユネスコ無形文化遺産に登録したのですね。
建造物木工、檜皮葺、茅葺、屋根板製作、左官、建具製作、畳製作、日本産漆の生産・精製など。ここに当然、鍛冶屋さんの団体が入っていなくてはいけないと思うのですが、入っていないのです。この事は調査をしていて、いくつかの産地の方から言われました。非常に嘆いておられました。

もちろん経産省で各産地を産業として振興していくのは大事なのだけれども、多分これからは、これは日本の文化のインフラのようなものなので、文化として支えましょうという動きを始める必要があると思うのです。そのためには産地を越えて、与板も三条も三木も、あるいは越前などの他の刃物産地の方たちも、産地を超えてつながって研修制度をしたり、技術を継承する必要があるかと思っています。

今日はそれを一つのきっかけに、みんなで考えたかったというところです。

寒い中、長時間お付き合いいただいてありがとうございました。登壇いただいた森田さん、西さんに拍手をお願いします。本日はありがとうございました。

以上

彫刻刃物の技術継承を考える
車座集会 報告書

《 調査 》

久津輪 雅 (岐阜県立森林文化アカデミー教授)
森田 直樹 (鉋鍛冶職人・三代目 千代鶴貞秀)
西 禎恒 (鉋台職人)
大滝 絢香 (匠の技を支える道具の保存伝承事業 調査員)

《 調査協力 》※敬称略

門脇 豊 (公益財団法人 美術院)
森 雅晴・森 隆浩 (鞘師)
高田 慈眼・高田 和司 (仏師)
小坂 礼之 (彫師)
齊藤 和芳 (小信)
八重樫 潤一 (八重樫打刃物製作所)
高橋 和彦 (高橋製作所)
小倉 成年・小倉 一哲 (小倉彫刻刃物製作所)
松丸 一男 (清綱彫刻刃物製作所)
今井 義仁 (今井義延製作所)
高橋 亮一 (高橋特殊鑿製作所)
高橋 典三 (高橋和己特殊鑿製作所)
高橋 資 (高昇鑿製作所)
小山 啓 (小山市刃物製作所)
高田 賢一 (高田製作所)

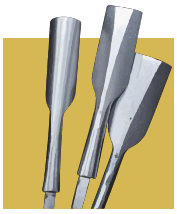
《 表紙デザイン・レイアウト 》

三木 智子 (有限会社ブレス)

《 運営 》

河田 哲也 (岐阜県環境生活部県民文化局 文化伝承課長)
末松 光孝 (岐阜県環境生活部県民文化局 文化伝承課係長)
蓑谷 百合子 (YURIKAZE)

2023年11月 発行
©岐阜県
本報告書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。



彫刻刃物の技術継承を考える車座集会 報告書